宇都宮の民話

宇都宮市教育委員会

表紙版画

二荒山神社（明治10年当時）

〈川上澄生作〉

文化財シリーズ第6号

宇都宮の民話

昭和58年 2月

宇都宮市教育委員会

序

千年余の歴史を持つ宇都宮市には多くの民話が生れ、育ち、一方では長い年月の中で消えていったものも、少なくないと思います。

民話は、先人の生活感情を表現したものであり、現代に生きる我々にとっては、その時代に生きた人々の生き方を知る大切な資料でもあります。

しかし、戦後急激な価値観の変化等から、市民の心からこれらの民話が忘れ去られようとしていることは、誠に残念であると言わなければなりません。

この度、市内に伝承する民話を一斉に調査したところ、当地に発生した民話の他に、旅人がもたらしたと思われるものもあり、本市が古来の交通の要衝であったことをよく現わしております。

ここに文化財シリーズ第6号「宇都宮の民話」を発刊致しましたので、生活は貧しくとも豊かな想像力と潤いのある心を失わなかった祖先の生活態度を汲み取っていただければ幸いに存じます。

最後に、本冊子の発刊にあたり、誠意をもって調査をして頂いた文化財調査員の方々及び調査に御協力いただいた話者の方々に心から感謝申し上げます。

昭和58年2月

宇都宮市教育委員会

教育長　後藤一雄

目　　次

序　　文

まえがき ……4

話者一覧 ……5

参考書籍一覧 ……5

1 朝日観音霊験……6
2 痣地蔵……7
3 汗かき阿弥陀……8
4 雨乞い山……9
5 天子塚……9
6 飯山の獅子舞……10
7 五十里洪水の予言……11
8 一条町の坂道……12
9 宇都宮城の釣天井……13
10 宇都宮明神援兵の話……14
11 うらない仏……15
12 大網のいわれ……15
13 大石神社……16
14 大谷寺……17
15 おしどり塚……19
16 おしんめさまのこま犬…20
17 おびんずるさん……20
18 男抱山物語……21
19 御室の観音様……22
20 鏡ヶ池……23
21 鎌倉坂……23
22 亀井の水……24
23 茅勘助の碑……25
24 黄鮒と郷土玩具……26
25 久部川の水止め……27
26 孝子桜……28
27 ごぜ石……29
28 静桜……30
29 蛇々窪の大蛇……31
30 篠井の池……31
31 正月餅と宝泉寺……32
32 成高寺……33
33 白坂観音……35
34 末広稲荷……35
35 雀の宮……36
36 関堀の獅子舞……37
37 宗円獅子舞……37
38 訴人婆さん……38
39 田芋おぢ……39
40 大豆三粒の金仏……40
41 田うない地蔵……41
42 多気城運命の日……42
43 稚児が坂……43
44 稚児の墓標……44
45 鶴舞塚……44
46 鉄五郎の仇討ち……45
47 伝右衛門と白イノシシ…46
48 百目鬼……47
48 道鏡の降雨祈願……48
50 飛山城の白ナマズと古井戸48
51 戸室山の百穴……49
52 とんでもねえ太郎左衛門50
53 名主弥治右衛門……50
54 長岡の百穴……51
55 長柄稲荷……52
56 白蛇……53
57 橋潜り地蔵……54
58 初音観音……55
59 樋爪氏の首……55
60 火防き延命地蔵……56
61 藤原利仁の悪者退治……56
62 不思議なお灯明……57
63 身代り地蔵……59
64 八坂神社のわき水……60
65 六道闇魔堂……61

未収録表題一覧 ……62

さくいん ……63

あとがき ……65

ま　え　が　き

本冊子は、昭和57年度に宇都宮市教育委員会が、市文化財保護審議委員会の答申を受け、市文化財調査員活動の一環として実施した「伝説と伝承調査（昭和57年度の課題別文化財一斉調査）」の結果をもとにしてまとめたものです。

調査は、昭和57年４月21日から11月30日迄とし市内全域について実施しました。

その結果、112件が報告されましたが、本冊子では、書籍等に掲載されているもので調査漏れと思われる民話を加えて収録しました。

本冊子の編集は、市教育委員会社会教育課の職員があたり、編集にあたっては、一応次の基準を設定しました。

1．内容を記して掲載する民話は、民話を「民間に伝承されている説話（広辞苑・岩波書店）」とし、昔話・伝説等に該当するものとする。

2．上記に該当しないと思われるもの及び該当しても最近（明治以後）の話は、原則として内容は記さず、巻末に話の表題・伝承地等を記載するに止める。

3．民話の内容は、市文化財調査員から提出された報告書を中心に関係書籍を参考にして記載する。

4．民話の掲載順序は原則として五十音順とし、各民話ごとに関係する写真及び伝承地略図を収録する。

●宇都宮市文化財保護審議委員会委員

野中退蔵（委員長）	雨宮義人（副委員長）	岩崎良能（委員）
森谷　憲（委員）	冨　祐次（委員）	谷田部康幸（委員）
塙　静夫（委員）	阿久津　浩（委員）	小堀時蔵（委員）
戸田博亘（委員）		

●宇都宮市文化財調査員

黒川孝三（一条）	塚田宗雄（陽北）	加藤康照（旭）
内藤二郎（陽南）	石川秀男（陽西）	釜井宗一（星が丘）
松本文一郎（陽東）	平塚良雄（泉が丘）	粂川弘明（宮の原）
菊池正仁（平石）	直井茂吉（清原）57.11退任	増渕藤四郎（横川）
坂寄悦男（瑞穂野）	小林哲夫（豊郷）	半田　勝（国本）
高山伝治（城山）	福田　操（富屋）	阿久津義正（篠井）
松本笑悦（姿川）	小島豪市郎（雀宮）	田中親明（清原）57.12新任

—（　）は担当地区—

●宇都宮市教育委員会社会教育課職員

半田　昭（社会教育課長）	安達光政（文化振興係長）	定岡明義（文化振興係）
木村光男（文化振興係）	手塚英男（文化振興係）	梁木　誠（文化振興係）

話　者　一　覧

番号	氏　名	住　所	生年月日	番号	氏　名	住　所	生年月日
1	浅川　仁太郎	西原２－３－６	明39・1・30	18	小沼　和一郎	大谷町1036	昭6・1・13
2	新井　菊次郎	花房２－９－33	明32・5・25	19	小針　孝哉	泉町４－30	大3・3・19
3	安納　均	飯田町266	大13・5・27	20	小堀　時蔵	瓦谷町46	大2・6・19
4	伊藤　君香	塙田１－３－11	昭26・12・11	21	坂寄　悦男	上桑島町1963	昭4・8・17
5	稲木　宏済	材木町６－11	大13・3・6	22	佐々木　盛昭	泉町２－16	昭10・11・6
6	井上　栄雄	西原１－４－１	大5・12・13	23	柴田　日圓	戸祭町2－4－17	明40・9・7
7	入江　昇兵	下横田町724	大15・1・15	24	清水　円照	西原２－１－10	昭7・5・23
8	植木　与三郎	下砥上町1159	明33・1・18	25	田代　明男	駒生町947	大10・7・30
9	宇賀神　栄三郎	下欠町642	明28・5・2	26	高木　歓了	南大通り1-4-27	昭2・1・10
10	梅宮　芳太郎	清住１－３－48	明36・5・1	27	高木　順道	小幡１－２－10	大7・4・28
11	大久保　敢	塙田１－３－４	大10・12・15	28	徳田　浩淳	東塙田1－3－3	大4・1・18
12	大島　儀市	篠井町607	大7・9・10	29	根本　春子	栄町５－２	大4・3・8
13	岡部　佐四郎	篠井町1887	明36・1・25	30	北条　フク	松原３－７－３	明24・2・15
14	落合　昌市	戸祭元町2433	大12・10・12	31	福田　トシ	東谷町381	明45・3・1
16	加藤　テル	南大通り1－8－19	明39・8・10	33	松本　文一郎	石井町2334－５	明38・11・23
15	加藤　貞一郎	飯山町690	明38・2・1	32	真分　利七郎	中島町37	明25・11・18
17	小池　寿	岩曽町1353	昭2・1・22	34	横島　道男	鶴田町1640	大6・7・24

参考書籍一覧

番号	書籍名(著・編者、出版社等)	番号	書籍名(著・編者、出版社等)	番号	書籍名(著・編者、出版社等)
1	宇都宮の寺院（宇市教委）	15	栃木県神社誌（県・神社庁）	29	河内郡誌（河内郡教育会）
2	宇都宮の文化財（　〃　）	16	栃木県総史（小林友雄）	30	御室観音縁起（善願寺）
3	うつのみや（市広報課）	17	下野伝説集・追分の宿（〃）	31	自性院寺史（自性院）
4	宇都宮市60周年誌（　〃　）	18	〃　・あの山この里（〃）	32	同慶寺（直井茂吉）
5	宇都宮市史（田代善吉）	19	下野伝説集（県連合教育会）	33	富屋村史（福田操）
6	宇都宮誌（　〃　）	20	しもつけの伝説（　〃　）	34	姿川村史（市立図書館蔵）
7	宇都宮郷土史（徳田浩淳）	21	下野の伝説（尾島利雄）	35	豊郷村郷土誌（　〃　）
8	宇都宮の歴史（　〃　）	22	下野の仏像（野中退蔵）	36	篠井南部郷土誌（　〃　）
9	宇都宮史跡めぐり（〃）	23	栃木の城（下野新聞社）	37	横川村誌（　〃　）
10	栃木の民話（日向野徳久）	24	物語栃木県史（徳田浩淳）	38	平石村郷土誌（　〃　）
11	栃木の伝説(下野民俗研究会)	25	郷土史話（　〃　）	39	清原村郷土誌（　〃　）
12	日本の伝説・栃木（角川書店）	26	石の里の民話（大野登士）	40	国本村誌（　〃　）
13	栃木県の民話（日本児童文学者協会）	27	ロマンの寺（徳永隆平）	41	篠井村郷土誌（　〃　）
14	栃木県郷土史散歩(落合書店)	28	郷土資料事典・栃木(人文社)	42	城山村郷土誌（　〃　）

1　朝日観音霊験

伝承地：本町９―18（光明寺）　　参考書籍：１・６～８・17

（光明寺観音堂）

宇都宮５代城主頼綱は、武士の生活を捨て法然に帰依して実信房蓮生と名のり和歌を友としながら仏の道に精進した。

建保３年（1215）、京都から宇都宮に帰った蓮生は、蓬莱町に閑居するとお堂を建て観音像を安置したという。

この観音像は、「蓬莱観音」とも呼ばれたがいつしか「朝日観音」とも呼ばれるようになり、宇都宮景綱が東勝寺を建立すると本尊になったといわれている。

しかし、東勝寺が廃寺になってしまい観音像は光明寺（本町）に移され現在に及んでいると伝えられている。この「朝日観音」には、霊験あらたかな物語が数多く伝わっているが、ここでは四つの話を紹介する。

１．天授６年（1380）、宇都宮11代城主基綱は、茂原の地において小山義政の軍と戦い戦死し、ともの部将上三川城主今泉但馬守は小山勢に捕えられ、顔だけ残して地中に埋められ、さらに磐を固く木の大枝に結びつけられ逃げられないようにされてしまいました。

ところが但馬守は日頃から朝日観音を崇敬していたので、一睡もせず仏の加護を祈りました。すると、夜半に但馬守を激励する声が力強く風の音を押し分けるように響いてきました。すると不思議なことに、身体は地中から抜け出し、木の枝に結びつけられた磐は解けていました。そして無事に逃げることができました。

２．江戸時代のなかごろ、馬場町の乾いてしまった鏡ヶ池のほとりに、貧しいけれどもとても仲の良い夫婦が住んでいました。この夫婦は、毎朝朝日観音にお参りをすることを日課としていました。

長い間、子どものなかった夫婦に、朝日観音の霊験により男の子が授かりました。しかし、出産後、間もなく妻が病気で亡くなってしまったので、子供の父の悲しみは深く、近所の人たちも声もかけられないようなありさまでした。しかし、信仰心のあつい父親は、朝に夕に、朝日観音に子供が無事に大きく育つようにと祈りました。

空腹どきになると、乳を求めて泣くので、近所で半年前に出産をした人の乳をもらうことになりました。しかし、夜半に、母のぬくもりの恋しさのためか空腹のためかはげしく泣くので、止

むなく自分の乳をふくませたところ、不思議にも母親の乳のようになり、子供の空腹を満たすことができました。そして、無事に心のやさしい元気な子どもに育てることができました。

3．朝日観音を深く信仰していた道場宿の新吉は、朝日観音の縁日の帰り、ほろ酔い気分で鬼怒川のほとりまでやって来ました。すると突然、草むらに隠れていた賊が、新吉めがけて、剣を抜いて襲いかかってきました。あわてた新吉は、ほろ酔い気分もふき飛んでしまって、川沿いにある船着き場まで夢中で逃げたけれども、どうしたわけか、その日に限って船がありません。追いつめられた新吉は、ただただ一心に朝日観音に祈り川に飛び込みました。

すると、不思議なことに、水中に一度沈んだ身体は、浮き、川の上に立つことができました。

そして地面の上を走るのと同じように、鬼怒川の川面を走って、向う岸まで渡ることができました。賊もこの不思議な光景には、ただぼう然とするだけでした。

4．安永2年、西原組屋敷から出火し、宇都宮41町が全焼するほどの大火の時、朝日観音を信仰していた大工の平助は、火に追われて、命からがらやっとの思いで観音堂の前まで逃げてきました。しかし、火の勢いは増々激しくなり、お堂のまわりは、真赤な火の粉が舞い踊り、建物のくずれる音は、雷のようでした。

死を覚悟した平助は、地面に顔をつけ、身を小さくして、観世音の名を繰り返し、繰り返し唱えました。

すると、不思議なことに、突然、お堂と平助のまわりの火の勢いは、波が引くように、遠のいていき、助かることができました。

2 痣地蔵

伝承地：徳次郎町

参考書籍：33

（痣地蔵）

徳次郎町中町の日光街道沿いに、痣地蔵堂と呼ばれているお堂がある。ここは、むかし、神宮寺といわれ、このお堂の中に、痣地蔵が安置されている。

お地蔵さんにまつわる話しは数多いが、この痣地蔵は、あざやいぼで困っている者が願をかけるとすぐなおるとされているものである。

この地蔵は、変った姿の地蔵で、近隣の村はもとより、遠く茨城県のあたりからもおとずれたという。

比沙門山の西側の開墾の際に地中から発見され、智賀都神社に安置された後、現在地に移されたといわれている。

3 汗かき阿弥陀

伝承地：西原２―１―10（一向寺）　話者：24・28　参考書籍：１・２・４・９・18・22

（汗かき阿弥陀）

応永12年（1404）４月２日 宇都宮12代城主藤原（宇都宮）満綱の銘がある仏像で高さ約１ｍ、発願帰依の文字が衣全体にわたって刻まれている。この銅造阿弥陀如来坐像（国指定重要文化財）は、宇都宮満綱が願主となって、下河原長楽寺の本尊として鋳造された。長楽寺は、本多正純の時代に城拡張のため西原に移されたが廃寺になり、阿弥陀仏は一向寺の客仏として、今日に至っている。

阿弥陀仏は、万人を極楽浄土へ導く仏様として親しまれているが、この阿弥陀様は世に吉凶異変のある時、その前兆として、身体全体に汗をかくので「汗かき阿弥陀」として、昔から人々の信仰を集めてきた。発汗の記録は次の通りである。

１．応永30年（1423）　宇都宮氏13代城主持綱が、塩谷郡幸岡で自害する数日前。
２．天文18年（1549）　宇都宮氏20代城主尚綱、喜連川五月女坂で戦死した前日。（９月26日）
３．慶長２年（1597）　宇都宮氏が、豊臣秀吉に滅された10月上旬。
４．元禄11年10月（1698）　宇都宮領内の農民達が、免合（年貢の割合）訴訟のため、城下に集まったその前日。
５．享保８年（1723）　五十里洪水の前日。
６．宝暦３年（1753）　宇都宮領の百姓一揆が起こった２日前。
７．慶応４年（1868）　宇都宮焼失落城（戊辰戦役）の前日、４月19日と４月23日。
８．明治２年（1869）　材木町大火の前日。
９．明治27・37年（1894、1904）　日清・日露戦争前。
10．大正12年（1923）　関東大地震の前日の８月31日。

なお、一向寺には別に次のような話がが伝わっている。

「一向寺は一度も火災にあったことがなかったが、戊辰戦争の際には寺のまわりが火におおわれて、一向寺に火の手がかかろうとした時、汗かき阿弥陀の化身が本堂の屋根にまたがり、滝のような汗をかいて火を防いだ。

したがって、この阿弥陀仏は凶年を知らせるだけでなく、火難も打ち払う仏像といえる。

4 雨乞い山

伝承地：飯山町　　話者：15

（雨乞い山）

むかしは、日照りが続くと、大切な稲を枯らすことになりかねないので農民はたいへん恐れていた。

したがって、村には必ずといってよいほど雨乞いの場所があった。なかでも、村内に河川がなく天水に頼って稲作を行っている山合いの村では、日照りが少し長く続くと水不足に悩むのであった。

このような山間の農村では、平地の村以上に雨乞いは重要なものとなっていた。

宇都宮北部の山合いの農村飯山では、日照りが続くと村中総出で村内にある雨乞いの山愛宕山に登り、山頂にあるほこらにお酒を供え、その後ほこらの回りを「ジィッチとオップレショ」と何回も唱えながら回わって祈ると家に帰り着く頃には雨が必ず降ってきたと伝えられている。

5 天子塚

伝承地：東戸祭一丁目16（祥雲寺）　　参考書籍：1

（天　子　塚）

祥雲寺境内に天子塚と呼ばれている全長約40mの前方後円墳がある。

この古墳は、二荒の神（二荒山神社）を父とし雷の神（雷電神社）を母として生まれたものと言われ、天子塚という名もここからついたものらしい。さらに、不思議なことには、二荒山神社、雷電神社が、この天子塚からみて巽の方向へ一直線に並んでいるという。

また、天子塚は別名を雨子塚とも書き、干天が続いた時は、境内にある竜神様の前でお祭りをして、その後、塚の上を鍬で2～3回堀ると必ず雨が降るといわれている。

6 飯山の獅子舞

伝承地：飯山町（阿蘇神社）　　参考書籍：1

〈獅子舞の奉納〉

宇都宮に現存する獅子舞は、一人立三匹獅子舞と呼ばれているもので、飯山町に伝承されている獅子舞のほか新里町の宗円獅子舞、関堀町の獅子舞があり共に市の文化財に指定されている。

飯山の獅子舞は、鎮守府将軍藤原利仁にちなむものであると伝えられている。

延喜年間、藤原利仁は、近隣を荒し廻る山賊の頭目蔵宗・蔵安兄弟を高座山で追討した。

里人たちは、利仁を大いに崇め慕ったが、病にかかり飯山の地で永眠してしまった。

藤原利仁の死を悲しんだ飯山の人々は、利仁の守神の三尊神獅の頭を奉納すると共に毎年、阿蘇神社に獅子舞を奉納したと伝えられている。

7　五十里洪水の予言

伝承地：馬場通り１丁目　　参考書籍：10・18～20

（上河内村羽黒山）

江戸時代の天和３年（1683）、地震による山地崩壊のため、男鹿川がせき止められて、五十里湖ができた。五十里とは、江戸から五十里離れたところにあるという意味である。

享保８年（1722）８月の豪雨のため湖の水位は上昇し、せき止めていた湖水が一気に渓谷を走り、大洪水となり下流の沿岸村々の被害は目もあてられないほどであった。

この話は、この洪水を予言した、信心深いおばあさんにかかわるものである。

二荒大明神を深く信仰していた大工町の小倉屋のおばあさんは、ひと月も前の夢の中で、大洪水があることを知りました。その夢の内容は―二荒山神社の拝殿で神主たちが集まって相談をしていると、本殿の奥の方から、神の声がし「この付近は、８月８日に大洪水に見舞われ、多くの氏子たちは、命を落とすことになろう。お前たちは、どう考えるか。」というものでありました。そこで、長老の神主が、「五十里方面からの大洪水を羽黒山のふもとの大銀杏を倒し、少倉川の川筋に大木を横たえ、水の流れを散らせば被害は少なくなると思われます。」と答え羽黒山の神と相談するために、社前の木馬に乗ると、木馬はたちまち白馬に変わり、空高く飛び去りました。しばらくすると、羽黒山の神をともなって戻り、羽黒山の神木の大銀杏を切ることを二荒大明神に申しのべている―というものでした。

小倉屋のおばあさんは驚いて隣近所の人たちに大洪水が起こるとふれまわりましたが、だれ１人として信じてくれません。やむをえず、ただ１人、大明神の功徳にすがって被害を最少限度にとどめるため、一心に祈りました。

享保８年８月７日から降り続いた大雨は、五十里湖の堤を崩し、宇都宮方面に向かって流れ出しました。その時、羽黒山のふもとの大銀杏が、流れをさえぎるかのように横に倒れました。また二荒大明神の杉の老木は大銀杏を支えるために、羽黒山に向かって飛んでいきました。こうして宇都宮は大洪水から救われました。

このことがあってから、宇都宮及び付近の人々は、小倉屋のおばあさんの言葉が思い出され、いよいよ二荒大明神を尊敬するようになりました。

なお、杉の老木に支えられ、大銀杏が横たわっていたあたりは、現在逆木と呼ばれています。

8 一条町の坂道

伝承地：一条一丁目

（千　歳　坂）

（狸　　坂）

（首　切　坂）

（小　豆　坂）

東京街道（国道4号線）の、東側の旧一条町に四つの坂道がある。今はそのおもかけをしのぶことができないがこの坂道は、かつて宇都宮城に通じる古道であり、次のような名称がつけられている由緒あるものである。

1．千歳坂

一条中南側通りの坂で、この付近一帯は城内で使われる前栽畑（せんざいばた）があったので、これを千歳（せんざい）の字をあて〝ちとせ坂〟と呼ばれるようになった。

2．首切坂

一条中北側通りの坂のことで、今の一条中の弓道場のあたりに牢屋があり、その東側にあった池（堀）のそばに処刑場があったという。処刑された罪人の首をこの池で洗ったところから、この坂を〝首切坂〟というようになったといわれている。

3．狸坂

首切坂の北、松峰荘のある坂で、昔からこの付近一帯は狸や貉がよく出没したので〝狸坂〟の名がつけられたという。

4．小豆坂

狸坂の北、小林産婦人科病院のある通りの坂で、かつては両側から竹が覆いかぶさり、風が吹くと笹の葉のこすれる音があづきを洗う音に似ていたので〝小豆坂〟と呼ばれるようになった。

9　宇都宮城の釣天井

伝承地：本丸町　　参考書籍：3・4・6・10～13・18～21・23・24・28

（宇都宮城本丸跡）

宇都宮の伝説として、全国的に最も著名なものは、宇都宮城の「釣天井」の話であろう。古くから関東7名城の一つと賛えられた宇都宮城も、わずかに本丸跡を残すだけで往時の姿をしのぶことができないが、「釣天井」の伝説だけが宇都宮城の存在を人々に知らせている。

この釣天井の伝説は、徳川幕府2代将軍秀忠が、元和8年（1622）日光社参の帰路、宇都宮城に泊る予定を急に変更し、壬生を通って江戸に帰ったということと、その直後に幕府の重臣であった宇都宮城主本多正純が失脚し、横手（秋田県）に流罪になったことから作られた話しといわれている。また、将軍は秀忠ではなく家光とするのが一般的である。ここでも家光を時の将軍として「釣天井」を紹介する。

3代将軍徳川家光の弟に、駿河大納言忠長という人がいました。忠長の幼少の時のお守役が本多上野介正純でした。正純は忠長を3代将軍に立てようと思っていましたが、家光が将軍になってしまい残念がっていたところ、寛永13年4月（1636）家光は、家康公の7回忌法要のため、日光廟に参詣することになり、帰路宇都宮城に一泊ときめられました。これを知った正純は、老臣、河村鞘負と謀って釣天井の仕掛けを城内に作り、家光を圧殺しようと大工を集めて秘かに、その工事にとりかかりました。この秘密が他に漏れることを恐れて大工を城外に出しませんでした。しかし、大工の中に与五郎という若者がいて、与五郎は名主の植木藤右衛門の娘、お稲と恋仲になっていたため恋しさの余り、ある夜、お稲に会うため城内を抜け出しました。釣天井の工事が完了すると城内では、工事の秘密が漏れることを防ぐために大工達全員を殺害し、城中の古井戸に投げ入れてしまいました。

しかし、与五郎の亡霊がこのことをお稲に告げてしまいました。お稲も悲しさの余り、ことの始終を書き残して、与五郎のあとを追って死んでしまいました。

この遺書を父、藤右衛門が発見し、お稲の遺書と釣天井の絵図面を持って、日光から江戸へ帰る将軍の行列中の伊井掃部頭に訴えたので、家光は宇都宮城には泊らず江戸へ帰り、危うく命拾いをしました。

「釣天井」事件の主謀者である宇都宮城主本多正純は、捕えられて処刑されたということです。

10　宇都宮明神援兵の話

伝承地：馬場通り１丁目　　参考書籍：４・５・７・８

（二荒山神社）

平安末期に藤原宗円が宇都宮に土着し宇都宮氏の始祖となってから500年余が過ぎた天正年間、22代城主国綱は南からは北条の大軍、北からは那須勢と激戦を繰りひろげた。

この物語は、そのような状況の中にあって宇都宮氏が二荒山神社の社務職を兼ねており信仰心が厚いために常に二荒大明神の加護の中にあったということを示したものである。

北条氏は早雲、氏綱の二代にわたって伊豆・相模を討ち従え、さらにかねて異心のある宇都宮氏を征伐して奥州までもおのが掌中におさめようとしていました。

天正17年早春、宇都宮征伐につき軍馬の評定を開き、同年４月17日北条氏直の名代、北条左衛門を総大将に１万５千余人が小田原を出発しました。このことを早くも知った宇都宮国綱は「笑止に堪えざる北条の者共かな、一あわふかせてくれん。」とばかり、手兵わずかに６百余騎を率いてこれを雀の宮辺に迎え討ち、奇計をもってさんざんに北条氏をなやましました。しかしかつては宇都宮家の紀清両党一方の領しゅうとして知られていた芳賀伯耆守が北条軍にあり、誉れの勇士としてただ一人切り込んできたので、宇都宮勢は総くずれとなりました。この時、不思議にも宇都宮城の方から神風が起こり、白衣の社人約百名が現われて宇都宮軍に加勢し、手に手に御幣を持ち、勝誇った北条軍になだれ込んでいきました。この勢いにはさすがの北条軍も総くずれとなってしまいました。

大明神の援護によって敵を敗退させた宇都宮勢は無事帰城することができました。しかし不思議なことにこの時、宇都宮大明神の扉は末社に至るまで全開していたのでした。しかも、神前の幣はくには鮮血がにじみ、神馬は大汗を流して疲労の体でありました。さてこそ宇都宮大明神の御加護であったかと、城主国綱も神の威力に深く感激して感謝のしるしとして、神馬と太刀とを奉納したと伝えられています。

天正18年、国綱は豊臣秀吉の小田原征伐に出陣し、その功により羽柴の称号を賜わり所領を安堵されました。しかし、間もなく秀吉の勧めた養子縁組の話を受け入れなかったために、怒りにふれ、宇都宮城並びに所領を召し上げられ、宇都宮氏一族は総没落の悲運にあいました。

11 うらない仏

伝承地：石那田町（日光街道縁辺西側）

（うらない仏）

国道119号線（日光街道）が通過する石那田町の道路沿いに「うらない仏」と呼ばれている石仏がある。

この石仏は、大谷石を素材としているため仏像名がわからないほど風化しているが、おそらく地蔵菩薩であると思われる。

坐像であるこの石仏の台座には、いつの頃からか２・３個のまんじゅう形の石が置かれるようになった。

人々がこの石仏にぬかずいて何事か願いをかけた後、いずれかの石を手にして軽く感じれば願いがかなえられるあかしであるといわれている。

このようないわれがあることから、近郷近在では古くから石仏を「うらない仏」と玉石を「うらない石」と呼んで大切にしてきた。

12 大網のいわれ

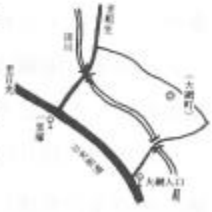
伝承地：大網町

参考書籍：33

（大網町）

大網町のいわれは、倭名類聚鈔に記されている河内郡10郷名のうちの大績（おおみ）が転じて大網になったとされている。しかし、このほかに、次のような言い伝えがある。

高座山の蔵宗、蔵安のひきいる賊を藤原利仁が平定したときのことです。その日は大雪で高座山に登ろうとしても、すべってしまってなかなかあがれませんでした。そこで、利仁軍は、ふじでもっこを作り、これを犬に引かせて山に登ろうと考えました。大網一帯には、もっこが何千、何百と並べられたので、山の上の賊たちは、網で魚をとるときのように自分たちをつかまえるものと思い込み、その動揺は大変なものでした。そして、とうとうこのもっこによる登山は成功し、山の上の賊をつかまえることができました。この後、いつのまにか、人々の間では、もっこが並べられたところを大網と呼ぶようになりました。



13 大石神社

伝承地：飯田町595　　話者：3

（大石神社）

飯田町は、現在宇都宮市を代表する稲作地帯であるが、かつては水不足に悩む土地であったという。

この飯田地区が豊かな水に恵まれたことについては、大石神社に次のような伝承がある。

むかしのことですが、飯田の村は田植の時期になっても水がなく、田植のできないことが続きました。お米の作れない農民の生活は悲惨そのもので、中には食べる物もなく餓死する人が出るありさまでした。

そこで村人たちが寄り合ってなんとかしようと相談しました。その結果、村の長老の意見に従って溜池を掘ることになりました。村人全員が出て何日も池を掘り続けましたが、水が出てきません。村人があきらめかけた時、ある若者が大きな石を取り除きました。なんとそこから、こんこんと水が湧き出てきて池はまたたくまに一杯になりあふれるばかりでした。

村人は、この石は神様だとして、ほこらをたててあがめました。これが大石神社の始まりで、以後この一帯は良い田（飯田）と呼ばれたとのことです。

14 大谷寺

伝承地：大谷町1198　　話者：18　　参考書籍：1・4・7・8・12・18・26・42

（大谷寺の磨崖仏）

阪東19番の観音霊場で宇都宮を代表す古刹として大谷寺がある。

この大谷寺には御詠歌

名を聞くも恵み大谷の観世音

みちびき給え知るも知らぬも

に、まつわるものとして、はなればなれになった父子が観音様の導きによって再会することができた話がある。また、大谷寺から南東の坂本に通じる旧道の「手引坂」に伝わる話として観音様の化身が大谷寺に参拝する旅人の手を引いたというものなど数多くの話が伝えられている。

平安時代の初めのことです。現在の大谷寺付近は、奇岩巨石におおわれているうえに荒々しい巨大な蜂（荒針の地名の起源）が群生し、人間が一歩も立ち入ることができないだけでなく、この蜂のために里人は多くの害をうけていました。

ある時、東国を行脚していた弘法大師の耳にこの蜂の話しが入りました。大師は、蜂に苦しむ里人を済うため蜂の住みついている山中に分け入って行きました。すると、天は暗黒の闇となり、巨大な蜂が群をなして大師に襲いかかりました。しかし、弘法大師は一心に読経を続けるだけでした。しばらくすると黒雲が去り青空が広がる（大谷寺の山号天開山の由来）と共に、蜂も消え去り二度とこの地には現われなかったとのことです。

また、弘法大師は蜂の住んでいた岩山の壁に一夜のうちに観音像を彫り込みました。この観音様が、現在の大谷寺の本尊で国の重要文化財に指定されている千手観音であると伝えられています。さらに、観音様を刻み終った時、大師はすぐ前を流れる川でみそぎをしていずこへともなく立ち去ってしまいましたが、里人が川のほとりに立ったところ大師の姿が川に残っていたので（姿川の河川名の起源）人々はその姿を拝み弘法大師の高徳をしのんだと伝えられています。

歌によまれた大谷観世音と孝子源三郎については次のような伝説があります。

承安年中三河国吉田城下に一人の農夫がありました。家が貧しいため、その日その日の暮らし

にも事欠くほどでした。この農夫は40のさかをこえて初めて一人の男子（源三郎）をもうけたため、夫婦の喜びはたとえようもなく、その成長を無上の楽しみとしていました。

ところが源三郎が3歳の春、父は貢役のため鎌倉に下り、数年間逗留する間に仲間の婦人となれ、ついに婦人の故郷下野に下って宇都宮に居住することになってしまいました。一方、三河の妻子は明けても暮れても父の帰りをただ待ちわびていましたが、ただの一度さえも音信がないので、毎日涙の日を送るようになりました。

こうして愛児も11を数えることになったその年の秋のことです。母は病床につき、夫を思いわが子の将来を案じながらついにあの世に旅立ってしまいました。ただ一人の頼みである母を失った源三郎は、さすがに嘆き悲しみましたが、けなげにも、その後土地の鎮守に日参して、「わが父が娑婆にあるならば、一度は会わしてください。」と、ただ一念に祈るばかりでした。ところがある時、神慮のあわれみに、「汝は父に会わんと思わば下野国宇都宮に下り大谷寺の観音に祈るべし。」と、夢想のお告げをいただきました。時に12歳となった源三郎は、お告げのとおり下野をさして乞食の旅を続けてようやく宇都宮にたどりつき、大谷観音に参けいして「早く父に会わせてください。」と、真心をこめて祈念したのでした。この父を慕う切なる孝心に大悲の感応があったためであろうか、ある夜かれがうたた寝をしているかたわらに本尊が現われて、「汝は参けい人について各人の名を問い、かつ国を尋ねたならば父に会い得られるであろう。」との霊告があったのです。

これに喜び力を得た源三郎は、その後、昼は近辺に乞食して飢をしのぎ、夜は御堂の外に名号を唱え、日々参けいの人に名を問い国を聞いたため、その心を知らない者は狂人とあざけるばかりでした。

こうしてその年もすでに暮れ翌年の正月17日の夜のことです。観世音の夢想に「明日南の街道から来る貴賤男女の参けい人の中に必ずなんじの父がいるであろう。」と、重ねての大悲の示現に源三郎は大いに喜び、翌18日早朝から南の門外を往来して、老若男女の押し合う中を懸命に捜し求めていると、たまたまかれの足元につまずき倒れた一人の男がありました。源三郎は何気なく助け起こして、例の口ぐせにその名を尋ねたところ、意外にも捜し求めていたわが父でありました。お互いに顔の見覚えはなかったが、紛れもない親子の対面に二人のうれしさは、たとえようもなく、しばらくは前後を忘れて泣き喜びました。やがて二人はこれこそ実に大慈大悲のお導きと、華をた向け供養して感謝の意を表した後、連れ立って故国吉田をさして帰っていきました。

15 おしどり塚

伝承地：一番町　　参考書籍：3・4・6～9・11～13・18～21・28

（おしどり塚記念碑）

「おしどり塚」は、鎌倉時代に無住法師によって書かれた沙石集によって紹介された物語の跡地として、市の文化財に指定されている。

この話は、一つがいのおしどりと猟師のいきさつを物語にしたもので、同様の物語は全国に伝わっており、本県でも、佐野市に「おしどり塚」が存在する。

しかし、沙石集の著者である無住法師は、宇都宮氏と関係があるといわれている。すなわち、無住法師は源頼朝の武将梶原景時の孫で元治元年（1199）梶原氏の滅亡後、宇都宮5代城主頼綱の妻になっていた伯母（景時の娘）を頼って、宇都宮に来たといわれている。里人から聞いた話を後年、沙石集に書きとめたものであろうといわれている。明治27年8月（1894）、戸田香園撰文の「鴛鴦塚之略記」という碑文にも同様のことが記されている。

鎌倉時代のことです。二荒山神社の東側を流れていた求食川は、川岸に柳が茂っていて水鳥たちのよい住いでした。この求食川から、八幡山一帯を猟の場としていた猟師がおりました。

ある時、この猟師は一日中、獲物を求めて山を歩きまわりましたが、兎一匹さえしとめることができず、がっかりして家路につきました。そして、求食川のほとりを通りかかった猟師が、のどかに遊んでいる一つがいのおしどりを見つけました。猟師は、喜んで弓を引きしぼり矢を放ったところ、ねらい違わず雄のおしどりに命中しました。猟師は首を切り落として雄のおしどりを持ち帰りました。翌日、猟師が川岸を通りかかったところ昨日、おしどりを射とめた場所に一羽の雌のおしどりがうずくまっていました。猟師は動かないおしどりですので、簡単にしとめることができました。ところが、そのおしどりをあげてみたところ、昨日ころした雄のおしどりの首を羽の下にだいていたのでした。

これを見た猟師は、鳥のもつ愛情に深く心を打たれ、今までの行いを後悔し頭をまるめ僧侶になり、川岸に塚を造り、石塔を建ておしどりの菩提をとむらったということです。

16 おしんめさまのこま犬

伝承地：徳次郎町1594　　参考書籍：33

（神明宮）

徳次郎町の国道293号線を北に入った日光宇都宮道沿いに神明宮というお宮がある。ここは、むかし、徳次郎大字の中心であったといわれ、お宮は奈良時代の宝亀2年(771)の建立で、五穀豊穣、災難防止の神である。

神明宮の守り神として2頭のこま犬がおり、次のような言い伝えがある。

このこま犬の前で願い事を申し述べた後、「もしかなえられるならば軽くお上りください。」と言いながら両手でこま犬を持ち上げると、願いがかなえられる場合には軽く上がり、願いがかなえられない場合には重くて動かないということである。

しかも、この占いがよく当たるということで、多くの人でにぎわったといわれている。

17 おびんずるさん

伝承地：小幡1－2－10（宝勝寺）　　話者：27

（おびんずるさん）

通称清住町通りと呼ばれている旧日光街道の西側に、宝勝寺がある。

宝勝寺は、「日限地蔵尊」で有名であるが、同時に「おびんずる」と称する木造仏（坐像、像高約50cm）が安置されており、人々に深く信仰されてきた。

「おびんずる」とは賓頭盧頗羅堕〔ビンズルハラダ〕のことで、16羅漢の一つである。

宝勝寺の「おびんずるさん」は、古くから万病を取り除いてくれるありがたい仏様であり、病人は自分の悪い部分を手でなで、その手で「おびんずるさん」の同じ所をなでると不思議なことに病はたちまちなおるということで、多くの人々がこれにあやかったとのことである。

18 男抱山物語

伝承地：徳次郎町　　参考書籍：33

（男抱山）

男抱山は、富屋地区の西部の西根と呼ばれるところに連らなっている山の一つで、富士山のように長いすそを引いた美しい山である。この山に次のような物語が伝えられている。

江戸時代、元禄のころ白沢宿（今の河内町）に「きし江」という名の美しい乙女が住んでいました。ふとしたことから徳次郎の西根に病気療養に来ていた江戸の「甚九郎」という男と知り合い、純真な愛情をもやす身となりました。甚九郎は江戸に妻子を残して来ておりましたので、里人はきし江を「あれいたずら娘よ」、「不義者よ」と後指をさしましたが、それでも3里の道を毎日せっせと、いとしい男のもとに通い続けました。一方、甚九郎は、この娘をいとしの者よと思い、またある時は年長者のこととて、その先の分別を考えて、苦しまないではいられませんでした。そこで男は一案を考え、ある日、娘に言いました。「あなたが、そうして親も姉妹も省みずに妻子まである私みたいな者をこんなに思ってくれる誠心を、大変うれしく思います。しかし、世間の口もうるさいことですし、あなたも毎日毎日3里の道を通いつめることも容易なことではないでしょう。私をそれほど思ってくれるのなら、わざわざここまで来なくてもその思いの数々を文に書いて、毎日明の六つにそれを燃してください。あなたが心変りしない時には、その文は紫色の煙をあげて燃えるでしょう。私は、これを男抱山の頂上から眺めて満足いたします。」

翌日から、きし江は、甚九郎にいわれたとおり、つのる思いを紫の煙にたくし、甚九郎は男抱山の頂上からはるかにその煙をみて安心して療養につとめました。ところが、きし江の姉が、妹の毎日の行動に不審をいだき、妹の恋文を盗み読んでしまい、そのおどろきのあまり、巻紙に水をそそいでしまいました。

きし江は、それとは知らず、いつものように火をつけたところ、湿り気のために煙は白く立ち昇ったのです。これを見た甚九郎は、娘の将来を考えて、一応は安心したもののやはり娘の心変りを悲しみ、ただ一時もその場にとどまっているのは忍びず、荷をまとめて江戸に立ってしまいました。一方、事の意外におどろき、あわてたきし江は、その足で男抱山にかけつけましたが、既に甚九郎は見えず、ただ白々とわが家の方、白沢宿に煙が立ち昇っているばかりでした。娘は悲嘆のあまり三日三晩、食もとらず恨しい白煙をのぞみながらついに山頂の露とはかなく消えたのでした。

村人たちは、娘の純情にいたく同情して、山頂に社を建てて悲恋の娘を弔いました。その後、この社は縁結びの社として尊ばれ、女性が秘かに詣でて、かなわぬ思いの相手方の方向を望めば、その恋の思いは不思議に相手にとどくと伝えられています。

19 御室の観音様

伝承地：南大通り１－８－19（善願寺）　　話者：30　　参考書籍：９・27・30

（御室観音堂）

宇都宮を代表する古刹である善願寺は「大豆三粒の金仏」で有名であるが、その金仏の南側に小さな御堂がある。

この御堂の下には「御堂の観音様」と呼ばれる仏像が安置されている。

この観音様には次のような話が伝わっている。

平安時代の初め（延暦15年―796―）のことです。蝦夷を討つために派遣された征夷大将軍坂上田村麻呂は、遠征軍を率いて京都を出発し、途中、宇都宮に一泊することになりました。

田村麻呂の本陣を置いた場所は、現在善願寺が建てられている場所でした。田村麻呂はこの地で一夜を明かしたわけですが、その夜、夢枕に自分の守り仏である如意輪観音が現われました。

田村麻呂は、これはこの地に観音様が止まりたいと考えているに違いないと思い、翌朝、草を刈り取りその草を結んで屋根とした庵を作り、自分の大切にしていた観音様を安置して奥州へ兵を進めて行きました。

以後、この観音様は里の人々に「草結び観音」と呼ばれるようになり、初めは深く信仰されましたがしだいに人々から忘れられてしまいました。

坂上田村麻呂が観音様を草庵に納めてから約400年の月日が過ぎ、世は源平の争乱が激しさを加えた寿永４年（1185）のことです。

京都の仁和寺の宮、法親王（御室と呼ばれていた）が難を避け、善願寺に隠れ住んでいました。ある時、法親王は池の中に坂上田村麻呂の護持仏であった観音様を見つけました。法親王は、観音様が粗末に扱われているのを嘆き、観音様を石櫃（石で作った箱）に納め地下７尺（約２ｍ）のところに安置してしまいました。

法親王が京都へ帰った後、人々は「草結び観音」を「御室観音」と呼ぶようになり、いつしか安産と学問の仏様として厚く信仰されるようになりました。

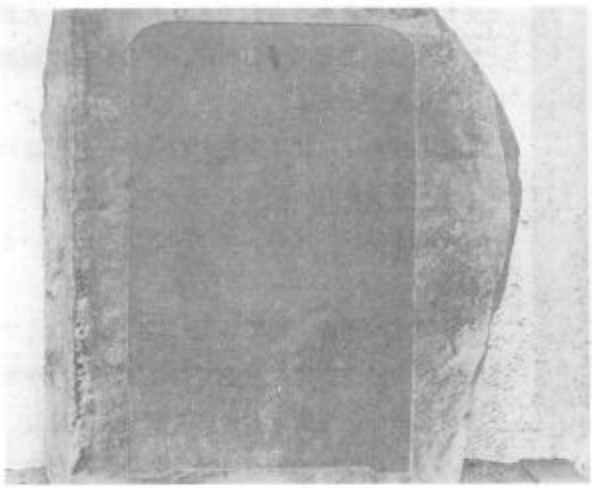
しかし、この観音様は一時粗末にされたせいか、お姿を見た人は目がつぶれるといわれ拝むことは固く禁止されていました。ある時、ひそかに石櫃の蓋をあけた者がありましたが、その人は永く眼病をわずらったということです。

昭和20年、石櫃が安置されている開口部が埋められ、その後その上にお堂が建てられ、「御室観音」は永遠に人々の目に触れることがない秘仏になってしまいました。

なお、現在のお堂内の観音様は、「御室観音」に似せて作ったものです。

20 鏡ヶ池

伝承地：大通り１、２丁目　　参考書籍：６～８



（鏡ケ池の碑）

宇都宮は、大むかし、池辺郷と呼ばれていた。これは、二荒山神社の南側の旧馬場町一帯に大きな池があったことによる。

この池で、源義経を慕って奥州へ向かう途中、二荒山神社に参詣を思いたった静御前が手を浄めたという。

その時、懐中の鏡が池の中へすべり落ちてしまった。鏡は池の底へ沈み、手も届かない深さであったので、あきらめて去ってしまった。

その後、ここから鏡が発見されたので、この池を「鏡が池」とよぶようになったという。

ところがある年、大暴風雨があって、周囲の丘が崩れ、池は大方埋まって小さな池となり、花屋敷（映画館）の一隅にわずかにかげをとどめていたが、現在は西武百貨店の南西の壁際に池の由来を記した記念碑が往時を物語るだけである。

21 鎌倉坂

伝承地：山本町　　話者：20

（鎌倉坂）

羽黒街道を北上すると田川に鎌倉橋がある。橋の名はかつてここを鎌倉街道が通っていたことを語っている。そしてこの近くには鎌倉坂という地名が残っており、次のような話が伝わっている。

源平の争乱の後、源頼朝が弟の義経追討のため軍勢を率いて奥州に向かったおりこの坂道で一休みし、手にした桜のムチをかたわらの地面にさしたまま出立してしまったが、不思議なことにそのムチが根を生じ、枝葉を繁らして、大木となり、春ともなれば見事な花を見せてくれたという。

大正初期頃までは、その桜か、あるいは子株か、孫株か、その桜だと言い伝えられた枯木の根株があったということである。

22 亀井の水

伝承地：西原町1056

参考書籍：7～9・17・20・21

（亀井の水）

江戸時代から、宇都宮の人々に親しまれた名所として、七木、七水、八河原があったが、その七水の一つとして、古くから多くの旅人ののどを潤した名泉「亀井の水」がある。

この水は、源義経の妻として有名な静御前のおともをした亀井六郎にかかわるものである。

現在では、石造りの親子亀が置かれ、それによりむかしの面影をしのぶ程度で、清水は湧き出てはいない。

なお、亀井の水の道をはさんだ西側に、江戸時代の初期に創建された常念寺があり、その寺の山号は、亀井の水の伝説にちなんで亀井山という。

源平の争乱が壇の浦の戦いをもって源氏の勝利に期し、世の中が落ちついてきた文治3年（1187）の春、源義経は兄の頼朝と仲たがいをしたために追われて、吉野山にかくれていました。しかし、追っ手が山のすぐ近くまできたので、武蔵坊弁慶とわずかの家来をともとして、奥州平泉（今の岩手県平泉）の藤原秀衡をたよって落ちていきました。

義経の妻の静御前は、夫のいる奥州へ行く決心をし、亀井六郎や駿河次郎らにまもられて、平泉に向かってたびだちました。

なれない長旅と、たび重なる心労のため、宇都宮大明神（二荒山神社）を目前にして、足どりが重くなり、のどのかわきがひどくなった静御前は、おともの駿河次郎に水を求めてくることをたのみましたが、次郎は追っ手にみつかることを心配し、ためらいました。その時、何を思ったのか、亀井六郎は、長い間神仏に祈り、持っていた槍を深く地面につきさしました。すると、不思議にも、その槍をつきさしたところから、清らかな水があふれ出しました。六郎はその水をすくい、疲れはてている静御前に差し出すと、大変喜んで、おいしそうに飲みほしました。

この霊験あらたかなる水を飲んだ静御前は、元気をとり戻し、夫のいる奥州の平泉に向かって出発しました。

この清水は、それ以後、六郎の名字をとり「亀井の水」と呼ばれ、多くの旅人ののどをうるおしました。

23 茅勘助の碑

伝承地：篠井町1887

話者：13

（茅勘助の碑）

日光街道（国道119）の石那田を船生方面に曲った下篠井の畑の中に風化した石塔が建っている。

この石塔は、無実の罪で殺された茅勘助の供養塔である。

茅勘助は、日光東照宮の金看板を盗んだ疑いで役人に追われて、この地まで逃げて来たが遂に捕われ直ちに首を切られてしまった。

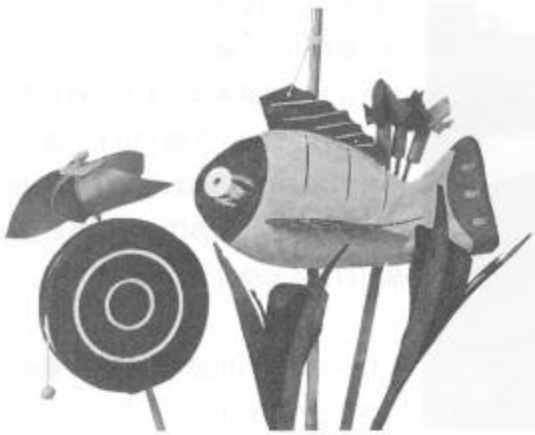
しかし、後日、真犯人が見つかり勘助の無実が明らかになった。

ところが、勘助が切られた場所である小さな沢は、勘助の血で赤く染まってしまい、以後清く澄むことがなかった。

そこで、東照宮は、勘助の霊を鎮めるため供養塔を建立したということである。

24 黄鮒と郷土玩具

伝承地：西原２丁目　　話者：１　　参考書籍：11・17



（黄鮒と郷土玩具）

宇都宮を代表する郷土玩具として、黄鮒・綿花・あやめ・豆太鼓があるが、本来これ等は、縁起物として作られたもので、正月の初詣や11日の初市で買い求め神棚に供え、暮れの二荒山神社のおたりや（冬渡祭）の際、だるまや他の縁起物と一諸に焼やしたものである。かつては、南新町の農家の副業として盛んに作られたが、現在では、浅川宅で製作されているだけであるため、貴重な民芸品になりつつある。次に、この４種の縁起物の由来について簡単に紹介する。なお、黄鮒については、他に宮島町付近に住んでいた大右衛門という猟師（漁師）と仙人の話しが伝えられている。

１．黄鮒（張子で作る）　ある時、宇都宮に天然痘が大流行したことがあった。むかしのことなので、良い薬もなく人々は、なりゆきにまかす以外に方法がなかった。ところが、ある人が田川にすむ黄色の鮒を食べたところ不思議にも天然痘がなおってしまっただけでなく、黄鮒を食べた人は病気にかからなかったという。しかし、黄鮒はそう簡単に釣れるものではなかった。そこで張子の黄鮒を作って今年も疫病にかからぬようにと年の初め、軒下につるし、後に神棚に供えて無病息災を願う習慣が生じて今日にいたっている。

２．綿花（紙と竹で作る）　農業に関した縁起物でむかしは、多くの農家で綿を作っていた。農民は自分達の衣類の多くを綿を原料とした木綿の布で作ったのである。綿の花は秋口に咲き、この花の咲き具合で、その年の稲の豊凶をうらなったという。そのため、綿の花がよく咲き、稲が豊作であることを祈って新年に造花の綿花を神棚に供えた。

３．あやめ（経木と竹ぐしで作る）　むかしはあやめの咲くころ、田植が行われた。あやめは水を好む、水が豊富ならあやめがよく咲く、故にあやめがよく咲く年は水が豊かで稲も豊作だというので、あやめの花を模したものを作り、正月神に供えて、その年の豊作を願ったということであり、綿花と同じく農業に関した縁起物である。

４．豆太鼓（紙製の小太鼓の両側に大豆を一つずつ糸でつるしたもの）　これも、正月の縁起物で、子供がマメに丈夫に育つようにと作られたもので、玩具的色彩（たいこを回すと、大豆があたりよい音を出すので、これで乳児をあやした。）がこい。

同時に、家族もみなマメで、太鼓のようにまるく、家内円満を願ったものである。

25 久部川の水止め

伝承地：新里町久部地区　　参考書籍：31

（水の枯れている久部川）

新里の久部を流れる川を久部川という。源を鞍掛山と半蔵山の渓谷から発し、りんりんとした清水は、大きな岩を洗い山をつたって栗谷・久部・山王と流れる。

この川のほとりは、大むかしより、開けており、ここの住民は、長い間、久部川の恵みを受けていたのである。

むかし、この川辺の久部に老婆が住んでいました。村中一といわれるほどの物持ち婆さんであって、何不自由のない暮らしをしていました。しかし、この婆さんは、若いうちからケチで、倒れてもただは起きないという人でした。また、自分の幸福以外は何も考えない、人の道も、義理も、人情も気にしない人でした。「川端のお婆さん」といえば、その地方で知らぬ者がいないほどでした。

ある日、老婆が機織りをしていると、一人の老僧が来て一杯の水を求めました。身には破れ衣をまとい、汚れた脚絆をはき、ぞうりのひももゆるんでいました。しわだらけの手には、珠数をかかげ、一本の杖で体を支え、誠にあわれにみえる老僧でした。しかし、日やけした顔には犯しがたい威厳がありました。老僧は、かれた声もあわれげに、しかもたいそうていねいに老婆に頼みました。「私は大谷より日光へ行く者です。のどがかわいたので、なにとぞ一杯の水をめぐんでください。」老婆は、機織る手も止めず、たいそうじゃけんな声で、「お前のような乞食坊主に井戸の水はもったいない。下を流れる久部川の水をすくい、勝手に飲むがいい。」と言いました。老僧は、再三、再四のどのかわきを訴えましたが、老婆は、聞こえぬ様に、返事さえしませんでした。さすがの老僧もその無情に怒りを発し、久部川に降り、もっていた銀杏の杖で呪文を唱えながら、川を三度うち、「秋冬6か月は、水は川床の下を流れよ。」というと、不思議なことに、今まで流れていた清水は、川床の下に入って流れ、川底は川原となってしまいました。しかし老婆の家の下流20間の所からは、またもとの川床を水が流れているので、余りの驚きと恐れに老婆は、ただ呆然と老僧を見送りました。そして僧は、その杖を路傍に立てて去ったのです。この老僧こそ弘法大師であり、後で知った老婆の驚きと後悔は一通りではなく、以後、改心して、生まれ変わった様に善女となり、善行功徳を施して一生を終わりました。なお、今もこの川の水は、その所だけ半年間は川床を流れています。また、杖の銀杏は、数年後、太い乳房の大木となり、乳飲み子にのませる母乳が出ない時、乳房の銀杏の木の下にあるお地蔵さんに石をあげて祈願すると、たちまちにして、母乳が出るようになったといわれています。

26 孝子桜

伝承地：古賀志町583（城山西小）

（城山西小の孝子桜）

城山西小の校庭内にある市指定文化財のシダレ桜は、「孝子桜」と呼ばれる樹齢約400年の老木であるが、毎年見事な花を咲かせている。この桜には、次のような伝説がある。

むかし、古賀志に病気の父親を看病しながら、山仕事や畑仕事に精を出していた孝行な息子がいました。

秋の収穫が終わりに近づいたころ、死期が近いことを感じとったのか、病気の父親は息子に、死ぬまでにもう一度桜の花を見たいと伝えました。しかし、季節は冬に向かおうとしているので、とてもかなえられない願いなのです。途方に暮れましたが、日ごろ深く信仰していた近くの大日様に願をかけました。雨の日も、風の日も、雪の日も、仕事の合い間を見つけては通いました。すると、小雪の舞い散る寒い朝、孝行息子の心が天に通じたのか、戸を開けると、静かな雪化粧を背景にして、桜の花がものの見事に咲いていました。そして、真白な世界の中にあわい桜の香りが漂い、病気の父の心に春を呼んでくれました。

27 ごぜ石

伝承地：横山町　　話者：20

（草むらにたたずむごぜ石）

宇都宮市の北部で河内町と境を接する山合いに宮内（横山町内）と呼ばれる小さな集落がある。

宮内に行くには、今も急な坂を越えなければならない。この坂は、念仏坂と呼ばれており坂の頂上付近には、この地区の人々が〝ごぜ石〟と呼ぶ石がある。

ごぜとは、目が不自由なため人並みの仕事ができず、生活のため三味線を弾き、歌をうたうなどして銭をこい各地を旅して歩く女の人たちである。

宮内の坂の石は、一見なんの変哲もないように見えるが、この石にはごぜがからむ悲しい物語が伝承されている。

江戸時代の話しです。毎年、冬になると雪に閉ざされてしまう北陸地方から、多くのごぜが各地へ旅にでました。宇都宮周辺には越後（新潟県）からごぜがやってきました。

ある年のことです。ごぜは、いつもの年と同じ道を通り旅を続けて宇都宮にやってきました。しかし、その年は、ひどい凶作で村人は自分達の食べ物にさえこと欠くありさまでした。楽しみの少ない村人にとって、村人が一堂に集まってごぜたちの三味線の弾き語りや歌を聞くことが冬の唯一の楽しみでした。

けれども、その年は、ごぜの宿になるはずの家のほとんどが固く戸を閉めてごぜを泊めませんでした。村人はいじわるしたわけではありません。ごぜたちを泊めても、出すたべ物がなかったからでした。泊る宿のないごぜは、空腹なうえに北風の吹きすさぶ夜を野宿して過す日が続きました。それでも、ごぜたちは次々と村を回りました。

そして、ある日の夕方、ごぜたちは念仏坂を宮内に向かって登っていきました。しかし、宮内に着いても泊めてくれるかどうかわからないと思うと、目の見えない空腹のごぜたちは歩く元気を失なってしまいました。そこで、ごぜたちは道の横にあった石の横に身を寄せあって一夜を過ごすことにしたのでしたが、その夜は特に冷え雪もちらつくほどでした。

次の日の朝、仕事に出かけた村人たちは、石の陰で身を寄せあい重なるように息をひきとっているごぜたちの姿を目の当たりにしました。

これ以後、村人たちはこの石を〝ごぜ石〟と呼んだということです。

なお、念仏坂はここで凍死したごぜたちのめい福を祈って名付けられたともいわれています。

28 静桜

伝承地：野沢町386

参考書籍：4・7・8・17・20・40

（亀田さん宅の静桜）

野沢の日光街道から東に入った亀田さん方の庭先に、源義経の妻として有名な静御前にちなんだ桜がある。この桜の木は、昔から「静桜」あるいは「御前桜」と呼ばれ有名である。桜の花は、ふつう5枚の花びらであるが、ここの桜は、5枚の花びらの中にかぶとのくわ形のような形をしたものがある。それは、花びらがかぶとを抱いているように見える。義経を慕った静御前の気持ちが、のり移ったようなこの桜の木には、次のような悲しい言い伝えがある。

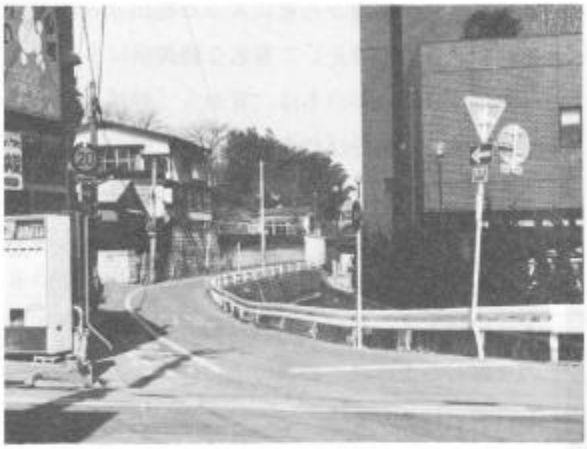
なお、亀田さんの家の裏手は竹林となっていて、その中に約5mくらいの池がある。この池は鏡ヶ池と呼ばれており、義経の死を聞いた静御前が、鏡を捨てることによって、女としての命を絶ったと言われている。

源平の争乱が一応おちついた文治3年（1187）、兄の源頼朝に追われ奥州平泉に身を寄せている義経を慕って、静御前は亀井六郎、駿河次郎をおともとし平泉に向かって旅立ちました。途中、宇都宮の二荒山神社にお参りした後、一行はさらに北に足を進め、野沢までやってきました。

しかし、静御前は自分の生んだ男の子が頼朝に殺された心痛と、なれない長い旅の疲れから、はからずも病む身となり、日に日に病気は重くなっていきました。おともの二人は、近くの池から冷たい水をくみ、手厚いかんごをしました。また、昼夜を問わず、神仏にも祈りましたが、静御前の病いはなかなかよくなりませんでした。病いに伏して、しばらくたつと奥州から鎌倉にむかう若い旅人の話し声が、静の耳に入りました。それは、奥州にいる義経公が、おともの弁慶と衣川のほとりで討ち死にしたというものでした。これを聞いた静御前は、恋しい夫、義経の死を深く悲しみ、間もなく亡くなってしまいました。おともの亀井六郎と駿河次郎は、村の人たちに手伝ってもらって大きな塚をつくり、手厚く葬りました。そして、その時、亀井六郎と駿河次郎は、義経から贈られ、生前大切にしていた桜の杖を塚の中央に逆さにさしました。しばらくすると、その杖から芽が出て、葉がしげり、美しい桜の花が咲くようになりました。その花は、静御前が義経を抱いているようにみえる不思議な形をしているので、村人たちは、だれ言うとなく「静桜」あるいは「御前桜」というようになりました。

29 蛇々窪の大蛇

伝承地：泉町



（蛇々窪と呼ばれた付近）

宇都宮の泉町付近に蛇々窪と呼ばれている場所があった。それは、「桂林寺の東南、延命院の北」（宇都宮史料）とあるので、現在、釜川の東（下野新聞社）あたりであったと思われる。

この蛇々窪には、その名のとおり蛇に関する伝承がある。

むかし、蛇々窪に、1000年以上も経たと思われる大蛇が住んでいた。大蛇は、時々姿を現わし、宇都宮の人々や宇都宮明神（二荒山神社）に詣でる人々を驚かせていた。地神である宇都宮の明神様（豊城入彦命）が、いくらたしなめても大蛇のいたずらは治まらなかった。

ある時、徳次郎（智賀都神社）の明神様（大己貴命）が宇都宮明神に来てその話を聞き、神代の神の威光を以って大蛇を鎮めたと伝えられている。

30 篠井の池

伝承地：篠井町607

話者：12

（篠井の池）

日光街道（国道119号）を北上すると釜川の水源になっている弁天沼があるが、さらに北の篠井町にも弁天と称する小さな池がある。

この池には、往時、弘法大師が立ち寄ったという言い伝えがある。

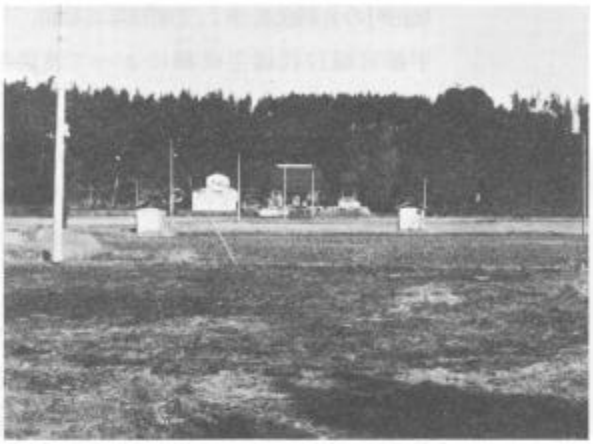
諸国行脚を続けた大師は、男体山に登り修業を重ねることを志し、この地を通りかかったところ、旅の疲れからか大変にのどが渇きなんともがまんすることができなかった。しかし、なかなかのどを潤す水は見つからなかった。

そこで、大師は篠の生い茂っている場所に分け入って、とある所に立ち止まった。その瞬間、大師の足もとからこんこんと水がわき出したという。

これが、後に池となり弁天池と呼ばれるようになり、弘法大師が篠の中に井戸を見つけた所から、このあたりを篠井と呼ぶようになったという。

31 正月餅と宝泉寺

伝承地：宇都宮市板戸町　　参考書籍：1



（宝泉寺とその周辺）

鬼怒川の東、清原地区の板戸町に宝泉寺という天台宗の名刹がある。この宝泉寺には、次のような話が伝承している。

江戸時代の初めのころの事でした。寺の近所の農家で正月餅をついていると、かまどの火が燃え広がり、数戸の農家が焼失しました。このような事が数回起こったので、部落の人々が相談した結果、お寺で共同で餅つきをすることにしました。

ところが同様にお寺も火災になってしまいました。人々は協力してお寺を再建し、再び餅つきを行ったところ、再度寺は焼失しました。その後、この部落では餅つきを止め、12月10日川ぴたり餅と一緒に正月餅をつくようになりました。この習慣は終戦後まで続きました。

現在では正月餅は、12月下旬につくようになりました。

32 成高寺

伝承地：塙田４丁目３－７

参考書籍：１・４・６～７

（成高寺本堂）

塙田町の名刹成高寺は、文明18年(1486)、宇都宮城17代城主成綱によって建立された。

宇都宮氏滅亡と共に衰微したが、元禄時代になって寺運を回復した。しかし戊辰の役で兵火をこうむり、諸堂寺宝類を焼失してしまった。

この由緒ある成高寺には数多くと言い伝えがあるが、その中で特に名高い「成高寺の天狗」・「狐の詫証文」・「啓磐禅師の不覚」の三つをとりあげる。

１　成高寺の天狗

明応９年(1500) ３月、第４世の住職に天英祥禅と呼ぶ書のうまい住職がおりました。ある夜、住職の夢に一人の老翁が現われ「自分は今夜高原山によじ登り、神仙と揮毫する約束を結んだがまだ書法に通じていない。幸いに師はその道の大家と聞いている。しばらくの間その手腕を貸されたい。」と、貞禅に語りました。貞禅も最初は極力これを断ったが、やむを得ずこれを承諾すると、たちまち右手がしびれて自由を失ってしまいました。不思議に思っていると、３日の後の夜半に老翁は再び姿を現わして「おかげで面目を保ち得た。長く当山の守護をして必ず師恩に報いよう。」と、述べて姿を消すと、自由を失っていた手は再びもとのように自由に動かせるようになりました。

当寺にある天狗はこの老翁の像を刻んだもので、霊験あらたかなので多くの信者でにぎわっています。

２　狐の詫証文

この話も成高寺第４世、天英祥貞禅師の話です。当時の成高寺は、女人禁制で、寺男が寺内の仕事を全て行っていましたが、そのころ、新左衛門という寺男と二人で暮らしていました。

ある時、檀家の法事に出かけ帰ってみると、いつも出向かえてくれる寺男の爺やがみあたりません。あちこちさがしまわると、竹やぶの中から大きなイビキが聞こえるので、不思議に思って近づいてみました。すると、年老いた大狐が寺男の着物を着て昼寝をしていました。

和尚は、夕方に爺やを呼んで、「爺や、お前は、寺のため、またわたしのために、大変よく働いてくれました。しかし、今日、お前の正体を見てしまったので、今日限り出ていって欲しい。」というと、狐は、驚いて、涙を流しながら「今後は絶対に正体を見せるようなことはいたしません。このお寺に仕えてから、私は、楽しい思い出でいっぱいです。どうか、今まで以上に一生懸命働きますので、終生置いてください。」と頼みました。和尚は、かわいそうになり、「それなら今いったことを書いて出しなさい。」といって証文を書かせました。狐の新左衛門は、死ぬまで寺の

ため、和尚のためによく働きました。そこで、和尚は、「新左衛門稲荷」として祀り、その恩に報いました。また、その時に書かせた証文は、今でも成高寺に残されています。

3　啓磐禅師の不覚

成高寺９世の啓磐禅師は、宇都宮城主の家臣である君島氏の子でしたが、名僧として多くの人々の信頼を受けていました。禅師は光明寺を開山する時に、その用材として、明神山の杉の木を伐採しました。そこで多くの人々は「明神様の怒りがあるのでは…。」といってうわさしあいました。

ある日、近くに住む一人の老夫が、田を耕し、疲れがひどいので、田の畔のところで、うたた寝をしていると、夢の中に白衣をつけた社人一人が現われ、「啓磐和尚は、神木を勝手に伐採しているので神罰を下そうと思うが、大変学職の高い名僧なので、天帝に告げて梵天王の許しを受けてから処罰するつもりである。そこで、今から天まで使いに行くので汝の白馬を借して欲しい。」といって姿を消したので、急いで家に戻り厩を見ると白馬の姿はどこにもみあたりませんでした。

翌朝、厩に行ってみると、白馬が大汗をかいて息づかいを荒くしていました。この不思議な出来事を啓磐禅師に告げると、老夫は気を失ってしまいました。

和尚は、「こうなれば、仏の助けを借りる以外に道はない。」と思って、それから昼夜を問わず勤行に励みました。

ある雨の日、茶の間で、茶を飲みながら、お客さんと話をしていると、不覚にもうとうとと寝入ってしまいました。すると、その夢の中、装束した者が現われて、「我は梵天王の使いの韋駄天である。汝、勝手に二荒の神の木を伐り不届である。汝の命を絶つようにと勅命を受けて来たが、汝の身の内に経文が満ちていて矢を射ることができなかった。今日こそ思い知れ。」といって一矢射ると、その矢が足の甲に当たったところで、夢からさめました。

驚いてとび起き、まわりを見回しましたが、だれもいません。「ついに心の中にすきをつくり、勤行を怠ってしまった。」といってとても残念がりました。

しかし、そのまま遷化することができたということです。

33 白坂観音

伝承地：山本町　　話者：20

（大悲堂の白坂観音）

一条天皇（平安時代の初め）のころ、藤原政治及び平安文化の全盛時代のことである。

天台宗の僧で『往生要集』を著わした恵心僧都は、全国行脚のおり、下野の国、宇都宮（現山本町）の地に宿をとり、聖観音像を彫ろうと発心し、本地仏として天笠の僧、毗首羯磨作の一寸八分の秘仏をおさめ、白坂峯に安置したという。

今も、山本町の中央部に「恵心坊」と呼ばれている所があり、さらに、そこには２ｍくらいの大谷石造りの橋があって「恵心坊橋」と呼ばれていたが、今は架け替えられ、むかしのおもかげは見られない。恵心僧都は、毎日この橋を渡り、観音像彫りにあたったという。なおこの像は、市の指定文化財となっている。

34 末広稲荷

伝承地：大通り１・２丁目　　参考書籍：６～８

（末広稲荷）

稲荷信仰は、農業神のウガノミタマの神、田の神に対する信仰で、仏教寺院では吒枳尼天を稲荷神にしており、江戸時代に繁栄した。その稲荷信仰にかかわるものとして、次のような話が残っている。

明和年間（1764～1771）、大工町（現在の大通り１、２丁目）に十一屋、井筒屋、漆屋などという商家があった。その家の付近に、毎夜どこからか砂が投げられ、降るようにバラバワと音がするので不思議がっていた。誰かのいたずらであろうと、戸締りを厳重にして、警戒していた。しかし、相変わらず２回も３回もつづけて音は止まず、時には、屋上から大きな石が落下し、茶わん、すり鉢などが割れるようなものすごい響きもしたが、翌朝見ると、何の形跡もなかった。

そのころ、この向い屋敷に、末広稲荷という祠があり、その前に小さな沼があった。その沼に付近の者が汚物を捨てるので非常に汚れており、この汚れを嫌ってこのような不思議なことがあるのではないかと、話し合い、早速皆で協力して掃除したところ、その夜から物音は、ぴたりと止んだという。

35 雀の宮

伝承地：雀宮町　　参考書籍：7・8・10・15・17・21

（雀宮神社本殿）

宇都宮の南部に位置する雀の宮は、現在の「雀の宮神社」を地名として発展してきた町であり神社名については、下野の始祖である崇神天皇の皇子豊城入彦命の流れである御諸別王を祭って「鎮の宮」と呼んだことに始まるという説がある。

この説だと「鎮の宮」が「雀の宮」に転化したことになるが、ほかに鳥の雀を祭って「雀の宮」とした説があるが、この説にも二つの説がある。

一説は、「ある男が妻と密夫に謀られ、餅（饅頭）に針を入れて食べさせられてしまった。苦しんで寝ていると、庭先にやはり苦しみながら韮を食べている雀がいた。その雀は数日にわたってやってきて韮をついばんでいたが、ある日元気になって飛びさっていった。男は、雀のいたあたりをよく見ると雀の糞の中に折れた針を発見し、自分も毎日雀のまねをして韮を食べたところ一命をとりとめることができた。男は命が助かったのは雀のおかげだというので、雀を大明神として祭る宮を建てた。」という話で、「雀の功徳」とも「饅頭物語」ともいわれている。

他の説は、次のような話しである。

平安時代の中ごろ、（長徳元年―995―）のことです。藤原実方という人が陸奥の守になりました。そして、陸奥の国へ向かう途中、雀宮の地でしばらく休み、再び出発しました。

一方、京にいて夫の無事を祈っていた妻の綾女姫は、実方の仕事が終わり、京に帰るのを待ちわびていたが待ちきれず、夫をたずねて奥州へ旅立ちましたが、雀の宮まで来たとき、病気になってとうとう亡くなってしまいました。綾女姫は、息をひきとる時に「宝物の玉」をとり出して、「わたくしが持っているこの宝は、むかし、天照大神と素盞嗚命が約束ごとをしたときにとりかわした玉で、藤原家に代々伝わっている大切なものです。素盞嗚命の不思議な魂をもった玉なので、この村を守る神として奉れば、この村は永く栄えるでしょう。」と言い残しました。

村人たちは、その遺言を信じて神社を建て、その「宝物の玉」を納めて、素盞嗚命をまつり、村の守り神にしました。ところが、陸奥の国の役人をしていた藤原実方も、長徳３年（997）９月19日に陸奥の国の笠島というところで病気になり、死んでしまいましたが実方の魂は雀になり、妻の死んだ場所に飛んで来たとのことです。それ以来、ここに住む里人は、実方もいっしょに神社にまつり「雀宮大明神」と名づけたと言われています。

36 関堀の獅子舞

伝承地：関堀町（観音堂）　　話者：20　参考書籍：2

（獅子頭）

宇都宮に現存する獅子舞は、一人立三匹獅子舞と呼ばれているもので、関堀町の上（関沢地区）に伝承されている獅子舞のほか新里町の宗円獅子舞、飯山町の獅子舞があり共に市の文化財に指定されている。

関堀の獅子舞は、京都御所内で舞われていたものであったと伝えられており紫宸殿獅子舞藤原角輔流と名乗っている。

藤原角輔は宮中にあって、悪魔退散・国家安康を獅子舞で祈とうする任にあったが、源頼義・義実父子が奥州平定のおり、従軍し関沢の地で討征軍の武運長久及び戦勝祈とうの獅子舞を奉納したという。

賊徒退治後、藤原角輔は帰京したが、角輔流獅子舞の技能は永く関沢の人々に受け継がれたと伝えられている。

37 宗円獅子舞

伝承地：新里町335　　参考書籍：2・7・8・29

（宗円獅子舞の奉納）

宇都宮に現存する獅子舞は、一人立三匹獅子舞と呼ばれているもので、新里町の宗円獅子舞のほか関堀の獅子舞（関堀町）、飯山の獅子舞（飯山町）があり共に市の文化財に指定されている。

宗円獅子舞は、平安時代の後期に宇都宮初代城主になった藤原宗円に由来すると伝えられている。

宗円は、康平5年（1062）源頼義・義家父子が奥州平定のおり、戦勝祈とうの獅子舞を伴って従軍した。

宗円の祈とうのかいあってか、奥州の安部貞任・宗任兄弟はたおれ奥州は平穏になった。宗円は、宇都宮に止まって城を築くと、近江坂本の山王（日吉神社）21社中7社を新里に勧請し（日枝神社）、そこに獅子舞も奉納することになったと伝えられている。

38 訴人婆さん

伝承地：今泉町1013

参考書籍：4・6・8・10・18～20

（興禅寺）

宇都宮８代城主の宇都宮貞綱という人の建てた寺に興禅寺がある。この寺の一角に薬師堂があり、その中に、舌をくぎで打ちつけられたばあさんの形をした石碑がおかれていた。この石碑には、二つの言い伝えが残されている。一つは、梶原景時の末っ子菊寿丸にかかわるもので、もう一つは、今泉但馬守の一子宗高にかかわるものであるが、二つの話は、登場人物、時代背景が違うだけで筋書きは、ほぼ同じなのでここでは、菊寿丸に関する話しを掲載することにする。

源平の戦いがはげしかったころの話しです。源氏の大将源頼朝につかえて手がらのあった武士に梶原景時という人がいました。景時は、仲間の武士たちと意見が対立したために、鎌倉を追われ京都に向かいました。ところが、駿河の国（静岡県）の清見が関あたりで、景時に反対する人々と戦いとなり一族の人々は、ほとんど戦死してしまいました。しかし、景時の末っ子の菊寿丸だけは難をのがれることができました。その菊寿丸は、二人の家来に守られて奥州におちのびることになりました。時は、正治元年（1199）の暮れ、一行三人は、疲れた足をひきずるようにして、田川のほとりにある興禅寺の門前にやってきました。門前で働いている婆さんに、わけあって追われている身なので、しばらくどこかへかくまって欲しいと金貨を出して頼みました。婆さんは、薬師堂の天井裏にかくれることを教えてくれました。まもなくそこへ、馬に乗った10人ばかりの武士が現われ、興禅寺のなかをくまなくさがしましたが、みつけることはできません。門前で働いている婆さんにたずねましたが、「知らぬ」の一点張りです。そこで、追手の頭は、たくさんの金貨と交換に居所を数えてくれるようにたのみました。欲の深い婆さんは、お金に目がくらみついに３人の隠れている所を教えてしまったのです。菊寿丸たちは、薬師堂からひき出され、あらあらしい武士たちにひきすえられて、その場で首を落とされてしまいました。見ていた人々は、あわれな菊寿丸に同情して涙をながし、あまりにも欲深いなさけ知らずの婆さんを憎みました。この事件が宇都宮の城主の耳にはいり、婆さんは日ごろのあくどい所業が調べられた上、打首にされました。その上に婆さんの強欲さや冷酷さ、舌先三寸のおしゃべりがとがめられて、舌に五寸くぎを打ちこまれた婆さんの姿の石碑がつくられ、薬師堂の中に置くことになりました。そして、これは、訴人婆さんの碑として、城下の人々にうそをついてはいけないという深い教訓となり、次のような歌が伝えられています。

訴人した姥もろともに嘘つかば、舌へはくぎをうつのみやのみ。

39 田芋おぢ

伝承地：西原町　　参考書籍：6～8

（西原台地）

平安時代のなかごろに編集された「和名類聚鈔」という日本最古の百科辞典には、古代下野国河内郡内に10の郷（村落）があったことを記している。それは、丈部、刑部、大統、酒部、三川、財部、真壁、軽部、池辺、衣川駅家の10郷である。

これらの諸郷は、それぞれ現在のどこにあたるかが推定されている。それによると「池辺郷」というのが、ほぼ現在の宇都宮市街地に比定されているようである。

ここで紹介する物語りは、この「池辺郷」（池の辺郷）という地名にまつわる言い伝えである。

平安時代のはじめごろ（弘仁年間）、池の辺郷の西原台地に「田芋おぢ」という漁師が住んでいました。田芋おじは、毎日、西原台地のふもとにある池に魚を釣りに行っていました。

ある日の午後、田芋おじはいつものように池のほとりで釣り糸を垂れていました。するとどこからともなく白髪の不思議な老人があらわれ、田芋おじに向って言いました。

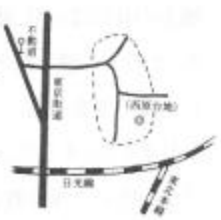
「あはたは、今日この池で大きな魚を捕えるでしょう。しかし、その魚は殺さずに必ず池に放してあげなさい。そうすれば、後で沢山の魚がとれるようになりますよ。」と。

あまりの突然のことに、田芋おじはしばらく口をあいたまま動けませんでしたが、やがて気をとりもどして、「はいわかりました。仰せのとおりにいたします。」と答えました。田芋おじは、教えてもらったお礼にと、午前中にとった魚をあげようとしましたが、老人は受けとらずに姿を消してしまいました。

しばらくすると、その老人の言葉どおり、田芋おぢの釣り糸に大きな魚がかかりました。

その姿はちょっと鯉に似ていましたが、見たこともない不思議な魚でした。田芋おじは、丸々と太った肉づきの豊かな魚に見ほれて、放してやることをすっかり忘れてしまいその魚を家へ持ち帰って食べてしまいました。

すると、俄かに空がかきくもり、怪しい雲が天を覆ったかと思うと、間もなく物凄い大雨となり、田芋おじの家を流してしまいました。続いて大地震が起きて、二荒山の東の岩が崩れ落ち、池の水を押し流してしまったため、多くの人が死に、池の魚もみんな田川へ流されてしまいました。



このことがあって後、池の水は涸れて陸地となってしまい「池の辺」の昔の面影はすっかり失われてしまったということです。

40 大豆三粒の金仏

伝承地：南大通り1－8－19（善願寺）　話者：16・30　参考書籍：1・4・6・9・11・19－22・24・27・28

（大豆三粒の金仏）

田川にかかる洗橋の北東に位置する善願寺に高さ約3.6mの銅製の大仏がある。

この大仏は享保20年（1725）に造られたものであるが、造られるいきさつについては次のような逸話があり、「大豆三粒の金仏」として昔から人々に親しまれてきた仏様である。

なお、この大仏（銅造盧舎那仏坐像）は宇都宮市の文化財に指定されている。

江戸時代の八代将軍吉宗のころ、善願寺住職中興第12世栄鈷和尚は大仏建立を思い立って弟子の貫栄とともに諸国を托鉢してまわり、浄財を集めましたが、思うように集まらず、徒らに歳月が流れました。

ある冬の夜のこと、旅の僧が現われて、一夜の宿を乞うのでした。栄鈷和尚は喜んで招き入れ、夜食をともにしながら、大仏建立の念願を打ち明けました。すると旅の僧は、「私は諸国遍歴の身で、何らお役に立つことは出来ませんが、ここに大豆が三粒ありますからご喜捨いたしましょう。」と言うのでした。住職が当惑していると、旅僧は、「この三粒の大豆を境内にまかれたら、来年は百粒程の大豆がとれるでしょう。これを信者に一粒ずつわけ、それからとれる大豆はすべて、寺に喜捨していただく。その大豆をまた多くの信者にやって、実った大豆は寺に喜捨していただく。このようにして十数年をすぎたなら、その大豆の収益は驚くばかりになるでしょう。」と付け加えました。栄鈷和尚は顔をほころばせて「いかにも仰せの通りです。なぜこれに気づかなかったのか……。」と合掌し感謝しました。旅僧を泊めたのも仏の導きかと心に感じ、早速この言葉を実行に移しました。それから毎年毎年熱心に農家を巡って趣旨を説き、信者を増やしながら大豆の生産に協力していただくことを頼んで歩きました。そして10年の後、このような大仏が建立されたのです。

この年、栄鈷和尚は60歳、弟子貫栄は36歳、師弟が一致して大仏建立に尽力した美挙はたちまち民衆の話題となり、誰が詠んだかわからないが、

〝土や石　積もれば富士の　山となる
　　豆も仏と　なるとこそきけ〟

という和歌が人々の教訓として伝えられるようになりました。

41　田うない地蔵（手負地蔵）

伝承地：南大通り１―４―27　　話者：26　　参考書籍：１・７・８・10・17・19・21

（応願寺）

宿郷町の応願寺は昭和20年の空襲により寺院も江戸時代からの記録もすべて灰になってしまい、下野風土記に「手負地蔵、往願寺如来の脇に立てたもうなり立像にて御長四尺ほど……。」とあった地蔵尊も焼失してしまった。

この地蔵尊には「田うない地蔵」と「手負い地蔵」の二つの伝説があり、その内容は「宇都宮誌料」の中に記録されている。

宇都宮の城下から２里ほど南へ行った御田村（現、市内上御田町）に深く仏教を信仰していた夫婦がありました。ある夜、一人の行脚の僧が一夜の宿を求めたので、快く泊め、世話をしてあげました。次の日の朝、手厚いもてなしに深く感謝した僧は、御礼のしるしに地蔵尊を百姓夫婦に与えて立ち去りました。夫婦は大いに喜んで、朝に夕にこの地蔵尊をおがみました。

そのことがあってから、半年ほど過ぎたある日のこと、夫が田に出て働いていると、14、５歳位の子どもがどこからともなく現われて、手伝ってあげるというので、手伝ってもらうと、５日はたっぷりかかる仕事をわずか１時間程で終わしてしまいました。しかし、御礼のあいさつをしようとした時には、姿が消えてしまっていました。

夕方、家に帰り仏間を開いて地蔵尊をおがむと、頭から胸のあたりまで汗が流れ、足には泥がついていたので、昼の子どもは、お地蔵様かと感謝し、その泥足をきれいに洗い浄め、この後、夫婦はともに出家して、いよいよ熱心に地蔵尊を信仰したということです。この後「田うない地蔵」と呼ばれて多くの人々の信仰を集めました。

その後、夫の僧が他の村へ行って泊ったおり、夢の中に地蔵尊が現われて「お前の家に盗賊が入り、いろいろなものを盗み去ろうとしたので、賊と戦って捕えようとしたが、賊に傷つけられた。」と言うので、驚いて帰ってみると、家の中は取り散らかされており、地蔵尊の姿が見えないので、急いで外にさがしに出ました。すると、たんぼの中に倒れていました。そして、引き上げてよく見ると、顔と肩の辺りに傷を受けており、賊と地蔵尊との格闘の跡がありありとわかりました。それからは、「手負地蔵」とよばれ、いよいよ多くの人々の信仰が集まりました。

その後、地蔵尊は夢で「宇都宮の大願寺の如来と同じ場所に住みたい。」と言われたので、大願寺（応願寺）に納め、応願寺では「身代り地蔵」とよび御本尊の脇に安置した。

42 多気城運命の日

伝承地：田下町

（多気山）

宇都宮の西端に、不動尊で有名な多気山がある。この多気山は城山と呼ばれ古くから山城があったことでも知られている。

多気山に城が築城された時期は康平年間とも天正年間ともいわれているが、定かではない。

この多気城には次のような話しが伝承されている。

ある年の秋、大江戸が大火災にあった時のことである。

多気城から早馬にて見舞の使客をつかわした。幕府方では、あまりの早さの見舞に驚いて早くこられたわけをたずねると、江戸城を見おろす高い所にに城を構えていることを話したので、気に入られず、間もなく廃城を命ぜられたという。

43 稚児が坂

伝承地：海道町（街道坂）　　話者：20　参考書籍：19・20

（稚児が坂）

源頼朝は、鎌倉に拠点を置くと鎌倉から各地方へ通ずる道を整備したが、これらの道はすべて鎌倉街道と呼ばれた。

奥州へ向う鎌倉街道は、宇都宮の北、現在の岩曽町にかかる鎌倉橋周辺で田川を渡り白沢（河内町）方面に向かっていたと伝えられている。

この話は、現在、通称白沢街道と呼ばれている県道の本市と河内町とに接する坂にちなんだものである。

源頼朝が本拠地を鎌倉に定め全国に守護・地頭を設置し、いよいよ幕府を開く前年の建久２年（1191）、伊沢家景は、鎌倉の頼朝にかわって、陸奥の国（東北地方）を治める奥州総奉行に任ぜられました。

家景は、多くの部下とともに、妻とさくら姫ときく丸という幼な子を連れて鎌倉をたち、奥州をめざしました。

宇都宮までくると、元気だったきく丸が、急に熱を出し苦しみをうったえましたが、暑さ負けだろうと思い先を急ぐことになりました。

よく朝、一行は宇都宮の宿をたち、鎌倉坂をすぎ、川俣を通り、街道坂（現在の白沢、高崎製紙工場前）にさしかかるころには、きく丸の熱はあがるばかりで、苦しさのため、息もできないほどになりました。

家景をはじめ、部下の侍たちの心配は、ひととおりではありません。近くの清水で頭をひやしたり、手ぬぐいで身体の汗をふき、薬を与えるなど、できるかぎりの介抱をしましたが、病気は一向によくなりませんでした。

そこで、家景と母親のやなぎ御前は、将軍頼朝がとくに深く信仰していた箱根権現のご利益にすがるために一心に祈りましたが、ききめはありませんでした。一同の手あついかんごのかいもなく、ついに、幼い命をおとしてしまいました。

家景をはじめ一同の悲しみは、ひととおりではなく、近くの村人たちも、あまりのあわれさのため声も出ませんでした。

あくる日、きく丸のなきがらは、街道坂の上にほうむられ、鎌倉からいっしょに来た供の者たちや、里人たちによって、厚く供養されました。

一行は、うしろがみをひかれる思いで、任地に向けて旅立ちました。

里の人達も、このことに深く心を痛め、だれ言うとなく、きく丸の死んだ街道坂を「稚児が坂」と呼ぶようになったとのことです。

44 稚児の墓標

伝承地：宇都宮市大通り5—3—14（清巌寺境内）　　参考書籍：1

（清巌寺境内の稚児の墓標）

宇都宮を代表する下町の名刹清巌寺の境内にある枸骨の樹の老木は、元来「稚児の墓標」として建てたものが根付き、成長したものです。

言い伝えによると、二荒山神社の弥生祭で花の会の神事が終わり、恒例により四人の稚児が花の付いた桃の小枝を持って舞っていました。突然、その中の１人が空中に舞い上がり、見物人が驚いて見上げる中、その姿はたちまち見えなくなってしまいました。

数日後、この稚児は宇都宮の北方、白沢の街道坂で死体となって発見されました。人々はこのいたいけな稚児の死を哀み、清巌寺に埋葬して可憐な花の咲く枸骨の樹で作った墓標を建てました。この墓標は根付き、現在でも夏になると稚児をおもわせる可憐な花を付け、見る人にこの伝説の稚児を思い起こさせます。

45 鶴舞塚

伝承地：東谷町406　　話者：31　　参考書籍：29

（鶴舞塚）

宇都宮市内に現存する古墳群の中で平地に所在する最大規模の東谷古墳群のうちの１基である。

東谷古墳群の中心に位置する笹塚（前方後円墳・県指定）の南に隣接した円墳鶴舞塚には次のような伝承がある。

日本武尊が東征のおり賊徒を追って鶴舞塚の横を通った時、塚の上に数羽の鶴が舞い降りていた。武尊は、塚の上で舞い遊んでいる鶴に矢を放った。

矢は狙い違わず１羽の鶴に当たったということである。

これ以後、だれいうとなく、この地を当矢（東谷）、この塚を鶴舞塚と呼ぶようになったと伝えられている。

46 鉄五郎の仇討

伝承地：上桑島町625　　話者：21

（鉄五郎の生家）

江戸時代の仇討ちとしては「忠臣蔵」と呼ばれる赤穂浪士の話しが有名であるが、赤穂浪士達の手本となったのが「浄瑠璃坂の仇討」であるといわれている。この仇討ちは、寛文8年（1668）宇都宮城主奥平忠昌の葬儀を興禅寺で営んだ際、焼香の席で家老二人が刃傷ざたとなり、殺された奥平内蔵允の一子源八が仇である奥平隼人を江戸牛込市ヶ谷の浄瑠璃坂で討ち取った事件である。この話は直木三十五氏によって小説になったほど有名であるので、ここでは、上桑島町に伝わっている仇討ちを紹介する。

安永の頃といえば賭博に耽ける者。長脇差しを帯び乱暴する者などの悪党が多く、世の中は乱れていた時代でした。安永3年（1774）11月、上桑島町の住人権左衛門は、おともの庄兵衛と千葉県相馬郡守谷にある愛宕神社にお参りに旅立ちました。ところが、水戸・中湊の住人儀七という物とふとしたことから口論となり切り合いになってしまいました。権左衛門は四方より集まった儀七の子分どもに前後左右に取り巻かれ、ついに切り殺されてしまいました。庄兵衛も刀を抜いてすけだちをしましたが多勢に小勢で、多くの傷を受けましたが一命をとりとめ上桑島の地に逃げ帰りました。庄兵衛は、権左衛門の子鉄五郎に父親が殺された様子を話しました。その結果実際に父を殺したのは儀七の子分で香取郡小南村の清助という者であるということもわかりました。

鉄五郎は、たいへん嘆いて父の仇を討たんと思いましたが、まだ年は15歳で、かよわき腕前ではかなわないから今少し辛抱せよという母の言葉にしたがって、やむなく思いとどまりました。2年後の鉄五郎が17歳の春のことです。母の許しを得て、ただ一人旅立ちました。父の仇、清助はなかなかみつかりませんでしたが天明2年(1782)やっとのことで銚子あたりに清助がいるらしいことがわかったがみつけることができませんでした。ところが同年7月に小南村で善光寺如来の開帳があり、多分清助も村へ帰ってくると考えて鉄五郎は村の入口で見張っていました。案の上、清助は村へ帰ってきましたが5～6人の子分を従えていました。鉄五郎は1人の力では手の出しようもないと思い、いったん上桑島に帰り従弟の円次郎、九十郎の両人の助けだちを頼んで、再び家を出発しました。ところが、小南村に着いた時すでに清助の姿はなく調べてみると木戸村に移ったとのことでした。鉄五郎ら3人は木戸村に清助を追い10月21日夜、清助のいる家をひそかに窺ってみると15～16人程集って賭博をしているところでした。3人は竹やぶの中に身を潜めて機会を待っていると清助が一人で提灯をさげて家から出て来ました。大いに喜こんだ3人は道に立ち塞って10年来の仇と声高々に呼び掛けて清助に立ち向いました。清助も心得たりと刀を抜くところに鉄五郎が切り込みました。すかさず円次郎、九十郎など打ち重なって清助に切りかかり遂に清助を討ち取ることができました。その後、鉄五郎ら3人は、仇討の筋合を訴え、さばきを受けましたが、「孝心感心すべし」ということで釈放となり、無事、上桑島の地に帰ったということです。

47　伝右衛門と白イノシシ

伝承地：横山町　　話者：20

（横山の風景）

宇都宮北部の丘陵地帯は、むかしイノシシや野ウサギたちの住みかであったという。

猪倉（今市市）は、イノシシの特に多く出没することから付けられた地名であり、篠井は、シシが水を飲みに現われる地であることから名付けられたとも伝えられている。

したがって、猪倉や篠井と山続きの横山や横倉など宇都宮北部にはたくさんのイノシシがいたといわれている。

ここで紹介するのは、横山の白いイノシシの話である。

江戸時代のなかごろの話です。横山村の山際の小さな家に伝右衛門という猟師が住んでいました。猟師といっても、主に冬しか狩りができないため近くの家の農作業を手伝う日が多い生活で、一人暮らしであっても伝右衛門はたいへん貧乏でした。

そんな伝右衛門にも、一つの楽しみがありました。それは、自分が毎朝毎晩おがみ信仰している浅間様の本社がある富士山に参拝することでした。しかし、貧しい暮しの伝右衛門にとってそれはしょせん夢でしかありませんでした。

それでも、自分が病気もせず元気でいられるのは浅間様のおかげであると信じる伝右衛門は、浅間様を祭る家の裏の小さなほこらに朝晩のお参りを欠かしませんでした。

ある年の冬の事です。伝右衛門は、近くのツツジ山へ狩りに出かけました。しかし、その日はウサギ1匹さえも捕れず、あきらめて家路につこうと山を下りはじめました。すると突然、前の岩かげから大きな白い動物がおどり出て、伝右衛門目がけて突進してきました。伝右衛門は、反射的に身がまえ満身の力をこめて矢を射たところ、狙い違わずその動物の急所に命中しました。伝右衛門は、しとめた獲物を見て驚いた。それは、なんと富士山の雪のように全身を白い毛でおおわれた大イノシシだったのです。

伝右衛門は、この世に二匹といない白イノシシを射止めた話しは人々の間に広まり、いつしか宇都宮の殿様の耳にも入りました。そこで、伝右衛門はおしげもなく殿様に白イノシシを献上しました。殿様は、この珍獣に驚きかつ喜び伝右衛門にほうびを下さいました。

伝右衛門は、白イノシシを授けてくれたのは富士の浅間様のおかげだと思い、さっそくお礼参りに旅だったとのことです。

48 百目鬼

伝承地：塩田１丁目、２丁目　　話者：４・11　参考書籍：１・３・４・７・８

（百目鬼の掛け軸と爪）

現在の県庁の東側塩田の一部を「百目鬼」と呼んでいるが、百目鬼の地名の起りとして、「百穴で有名な長岡に住んでいた鬼が、鬼の世界から抜け出したいと思い、塩田に現在もある本願寺へかよい仏門に帰依したところ、ついに人間界に人間として生まれかわることができた。ところが、その鬼は百匹の鬼の頭目であったことから〝百目鬼〟と呼ばれ、いつしか百目鬼が人間に生まれかわることができた本願寺周辺を百目鬼という地名で呼ぶようになった。」という話がある。

この話しを、もっと詳しくしたものと考えられる次のような逸話がある。

平安時代のなかごろ、田原藤太藤原秀郷が宇都宮に館を築いたといわれるころの話しです。

ある日の夕方、秀郷が、田川の方へ歩いていくと、突然、白髪の老人が姿を現し大曽という部落の北西にある兎田という馬捨場で、待っていてほしいと告げました。秀郷は、その場所でしばらく待つと、３ｍ余りもある大きな鬼が現われ、死馬に食いつきました。50ｍほど離れた所から様子を見ていた秀郷は、やがて満月のように弓を引きしぼり、鬼の胸板を射通した。逃げる鬼を追っていくと、明神山の後方に倒れ伏していました。鬼の体からは火炎が吹き出し、耳もとまで裂けた口からは黒い毒気を吐くため、近寄ることはできず、城へ引きあげた。翌朝、出向いてみるとその姿はなく、その場所は落雷に会ったように、ものすごいものでありました。

それから約400年後、足利将軍の時代に、塩田村の本願寺に、住職が定住すると火事がおこるとか、ケガをするということが必ず生じました。そこで、決まった住職はおかずにいましたが、智徳上人という徳の高い坊さんが住職として住むことになり、熱心に説教するようになりました。

すると、その説教に、毎日必ず姿を見せる若く美しい女性がいましたが、その正体を上人は見抜きました。秀郷に胸を射抜かれた鬼で、長岡の岩山で病気の治療をしていましたが、ようやく全快したので、むかしの威力を得るために、この場所で流した血を吸い取らねばと毎日来ていたのでありました。住職が寺にいたのでは邪魔になるので、火をつけたり、坊さんを傷つけたりしていたということでした。正体を現した鬼は、毎日話を聞いているうちに上人を寺から追い出せなくなったと、角を折り、指の爪を取って上人に捧げました。

それから、この付近を「百目鬼」と呼ぶようになったのです。

49 道鏡の降雨祈願

伝承地：石那田町1493

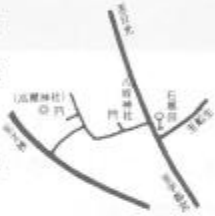
参考書籍：36

（高霧神社）

弓削道鏡は、天皇の位を狙ったため下野薬師寺に流された天下の悪僧ということになっているが、石那田町の岡坪地区には徳のある僧としての道鏡が伝承されている。

宝亀元年（770）、弓削道鏡は薬師寺の別当として下野に配流され悲嘆な日々を送っていたが、ある時、多くの人々の信仰を集めていた男体山に参拝することを思いたった。

道鏡は、今の岡坪の地までくると、大干ばつで苦しんでいる里人の姿を見てなんとか助けようと考えた。そこで、道鏡は近くを流れる田川の龍神に一心不乱に祈り続けたところ、一転にわかに雨雲におおわれ2日にわたる大雨となり農民を救ったという。里人は道鏡を慕うと共に龍神を高霧神社に合祠し末長く崇敬したということである。



50 飛山城の白ナマズと古井戸

伝承地：竹下町

参考書籍：23・32

（飛山城と鬼怒川）

飛山城は鎌倉時代末期の永仁年間（13世紀末）に、宇都宮氏の家臣である芳賀高俊が築城したと伝えられている。

この城は、高俊以後、慶長2年（1597）豊臣秀吉の命により廃城となるまでの300余年にわたり存続した。つまり、宇都宮氏の存亡と運命をともにした城だった。

史実は定かではないが、お家騒動が原因でお姫さまが断崖から鬼怒川の渕に身を投じ自殺した。その後〝白ナマズ〟に変身して今日も生きているという。また芳賀氏の菩提寺として飛山城と密接な関係がある同慶寺には、飛山城の抜け道だったと伝えられる〝古井戸〟がある。これを裏付ける話として古井戸に落としたなべ蓋が鬼怒川の渕に浮かんでいたという言い伝えがある。

51 戸室山の百穴

伝承地：大谷町

参考書籍：17

(戸室山)

石の里大谷の南方にそびえている美しい山がある。この山は戸室山といって古代の人々が信仰の対象とし、また付近は古代の遺跡地となっている。この戸室山に弘法大師が全国巡錫のおりに訪れ、一晩に百穴を掘ったという話が伝わっている。しかし、戸室山周辺は、石材の産地であったため大師の掘った穴は、ほとんど跡かたもなくなってしまったという。

夕やみせまる大谷路を錫杖片手に足ばやに急ぐ一行がありました。弘法大師とその弟子の２人です。大師がふとみあげると、真っ赤な夕日の中に戸室山がくっきり浮かび、とてもこうごうしく感じられました。そのために大師は、この山すそに一晩のうちに百穴を掘り村人の幸福を願うという大変困難なことを思いつきました。

夕暮れの大谷寺から響く鐘の音を合図に掘り出しました。おともの弟子は大師がのみをふるっている間は一心にお経をあげていました。静かな山里に、のみの音とお経が響きわたっていきましたが、だれ一人として気付く人がいません。大晦日の夜はとっぷりと暮れて、50穴を掘るころは戸室山は凍りつくような寒さの中にあり、空には満天の星が輝いていました。90穴を掘るころは、さすがの大師の身体も疲労のためにのみの動きが鈍くなってきました。しかも、96穴を掘るころは、東の空が、白み出しました。97、98、99穴いよいよ最後の百穴を掘ろうとしたとき、正月元旦の夜明けのため、村一番の早起きの若者が、普段よりも早く起きて、お正月の餅をつきはじめたのです。この音が一心にのみを打つ大師の耳に達したとき、大師は村人が起きるまでの間に百穴を掘るという願いが、成就しなかったということが残念に思われましたが、弟子と２人で99の穴に魂を入れるお経をあげたのち、山を出ました。

村を去ろうとした時、村境で村人に会ったので、一晩で百穴を掘ろうとしたが最後の１穴は餅つく音のために果たせなかったと伝えて立ち去りました。村人たちは、この僧は全国行脚の旅をしている弘法大師とその弟子であることがわかり、大師の願いを破ってしまったことに心を痛め、正月元旦の朝に餅をつくことをやめてしまいました。戸室山周辺の村人たちは、正月元旦の朝は餅をつくことをせず、赤飯を炊くようになり、餅は正月14日につくようになりました。しかし、現在では、このような習慣はなくなり、もとに戻りました。また、大師の掘った99穴もいつのまにか、消えてしまいました。

52　とんでもねえ太郎左衛門

伝承地：下欠町623　　話者：9

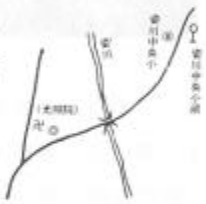
（太郎左衛門が鍔口を奉納した光照院）

姿川地区の下欠及び上欠町周辺では、ブラブラして遊んでいる人のことを「とんでもねえ太郎左衛門」と呼んだ。

これは、元禄時代、下欠下村に実在した太郎左衛門がたいへん怠け者であったことに由来している。

太郎左衛門は、下欠村の庄屋の長男として生まれたが、生まれつきの怠け者であったという。

しかも、太郎左衛門は庄屋としての身分をかさにきて村人にたびたび迷惑をかけていた。たとえば、自分の田の田植なのに村人に手伝わせ太郎左衛門は姿を見せなかったという。



一時が万事この調子であったため、年貢米も滞り、ついに領主からとがめられ太郎左衛門は所ばらいになってしまったと伝えられている。

53　名主　弥治右衛門

伝承地：二荒町５丁目　　参考書籍：６～８

（今小路周辺の古地図）

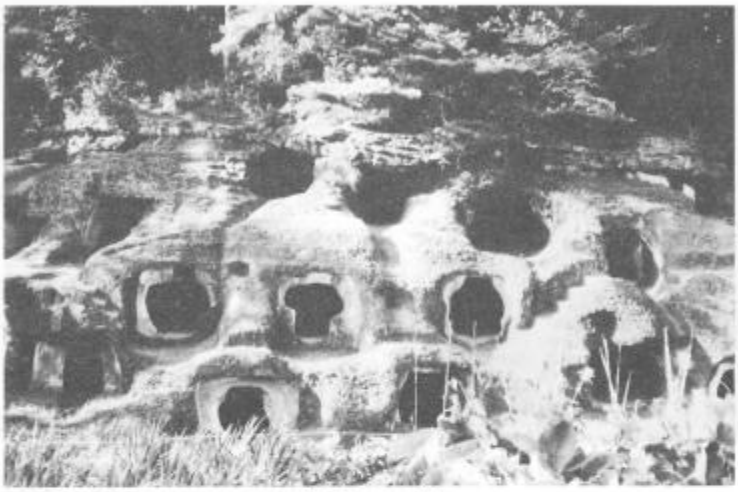
松平氏が宇都宮城主であった17世紀のなかごろ、今小路町（今の二荒町、一番町、二番町）の名主で、弥治右衛門という人がいた。情深い人で家業を弟に譲り、世話好きで、妻もとらず、一生独身で過ごした。

延宝８年（1680）から天和２年（1682）にかけての３年間は、大飢饉となったので餓死する人が、何人かあったが、弥治右衛門は、これを憐み、１月に２度ずつ粥を煮て施しをした。これを聞いた人々は、村々の百姓まで押し寄せ、いつも列をつくって並び、その数は１回数百人に達した。この救済を３年間続けたので、餓死する人はほとんどなくなったという。

弥治右衛門は、たびたび名主の役をやめたいと町奉行に願い出たが、その人格が立派であったのでなかなかやめることができなかった。老齢になり名主を辞してからは、興禅寺の林の中に小さな小屋を建て、隠遁した生活を送ったという。

54 長岡の百穴

伝承地：長岡町550　　話者：20



（長岡の百穴）

市内で、古代人の遺跡を代表するものとして長岡町の百穴がある。これは、大谷石に似た凝灰岩から成る丘陵の斜面に蜂の巣のようにくり抜いた横穴（古代人の墓）であり、県の史跡に指定されている。百穴という名称であるが、現在は52穴を数えるだけであり、各穴には、室町時代の作と思われる観音像が刻まれている。この百穴と観音様には次の四つの話しが伝わっている。

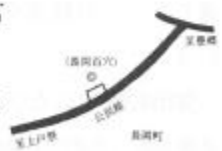
1．第10代の崇神天皇の皇子であった豊城入彦命が東征のおり、住路、長岡の地に来られた時、付近の豪族の強い抵抗にあい、容易に征服できず大激戦になった。その折、命の軍のおもだった家来百人程がこの戦いで戦死してしまった。悲しんだ命は長岡百穴に遺骸を手厚く葬ったという。

2．弘法大師が大谷に来られたおり、これより東方2里程のところに長岡という村があり、そこに豊城入彦命の家来衆百人の墳墓があると聞いてさっそく長岡の地を訪れてみた。すると墳墓は、ツタやカズラがおい繁り荒れ果てていた。大師は驚き、さっそく雑草を切り払い掃き清め、百人の御霊をまつるため露出した各穴の奥の壁に観音像を刻まれ手厚く弔われ、長岡百観音寺を建立されたということである。

3．百穴の観音像には、弘法大師一夜の作という伝承がある。大師は99体の観音像を彫り終った時に一番鶏が鳴き夜が白々と明けはじめてしまったため、100体目を刻むことなくいずこへか立ち去ってしまった。里の人達は、未完成の百個目の穴に石の観音像を安置した。

この観音像は、今も存在し、元観音と呼ばれている。

4．かつて、百穴には百観音寺という立派な寺院があったということである。しかし、この寺は次のような理由で廃寺になってしまったと伝えられている。三代将軍徳川家光の時、江戸城内で諸大名を集めて「長岡百観音寺」の由来が上演された。家光は、宇都宮城主に観音寺について訪ねたが、城主は領内にそのような寺はないと答えてしまった。宇都宮へ帰った城主は、家老から長岡に百観音寺が存在することを聞いて驚き、一夜のうちに寺を焼き払うと共に、村人に観音寺のことは口外してはならないと申し伝えたと言われている。



55　長柄稲荷(ヘビ長屋)

伝承地：宇都宮市栄町５－２（長柄稲荷）　　話者：29

（長柄稲荷）

古くから城下町として栄えた宇都宮には、伝馬町、鉄炮町、曲師町、大工町、博労町など、それぞれに意味や由来のある町名が残っている。

小門町もそれらの中の一つで、中心部からはずれた下町にあり比較的小割の家が多いということから、ついた名であるという。

この小門町（現在は栄町）には、長柄稲荷と呼ばれるヘビを祭った神社が今も残っているが、ここで紹介する物語は、この長柄稲荷とヘビにまつわる言い伝えである。

明治のはじめごろ、小門町の片すみに古びた長屋がありました。長屋には大工、左官、魚屋、うどん屋などいろいろな人が住んでいましたが、その中に山口宇堂と言う尺八の師匠がいました。

ある時、二荒山神社の境内に見世物小屋が掛かりました。虎や象などの南方の動物、曲芸をする犬や猿、人間の言葉を喋る鳥などいろいろめずらしいものがありましたが、中でも長さ３ｍをこえる真白なヘビは、小屋一番の呼び物でした。この話しを聞きつけて、見世物小屋には宇都宮かいわいはおろか、遠く小山や真岡の方からも見物人が集まりました。小屋の前は、連日見物人の長い列でにぎわっていました。

しかし、興行が終りに近づいたころ、このヘビが弱って今にも死にそうになってしまいました。そこで、見世物小屋をたたむ時にヘビを二荒山神社の裏山へ捨ててしまいました。ところが、自然に帰った白ヘビはたちまち元気を取りもどし宇都宮の下町かいわいを這いまわるようになりました。そのうち、山口師が尺八を吹くと、必ずその音に誘われるように小さな庭先にヘビが現われるようになりました。山口師の弟子達は毎夜のように姿を見せる白ヘビを気味悪るがってとうとう殺してしまいました。

殺されたヘビの皮は、近所の大工さんの手に渡りました。大工さんは、これを三味線屋に売ろうとしたが油がのりすぎて使い物にならないといわれたので、家の片すみにほうり投げていました。

ある時、大工さんの子供の火遊びから火事が起こり、小門町はいうに及ばず周辺の町を焼きつくす大火が起こっただけでなく、山口師の一家は熱病にかかり死にたえてしまいました。

後に、町内の人々が、火事で命を落した人々の供養をしたところ、ヘビの化身が現われたので、凶事はヘビのたたりだとして、ヘビを祭るほこら（長柄稲荷）を建てただけでなく火伏せの神様としてあつく信仰したとのことです。

56 白蛇

伝承地：塙田１－３－10（本願寺）　　話者：４

（白蛇の化石）

正中２年（1325）、礼智阿上人によって開山された本願寺は、滋賀県の番場蓮華寺の末寺で、関東時宗の一派に所属していた。

この白蛇の伝説は、本願寺にかかわる百目鬼の伝説よりも古く、本願寺縁起として伝えられている。

白蛇はその姿をみられることをひどく嫌っていたので、化石となった白蛇もあまり人目にふれることなく伝えられている。

今からおよそ700年くらい前の鎌倉時代のころのことです。塙田村の庄屋の息子が、隣り村へ行く途中、山道で子ども達にいじめられている白蛇の子を見て、助けてあげました。その帰り道、同じ場所で今度は女の子が泣いています。聞けば親にはぐれてしまったとのこと。庄屋の息子は家に連れて帰り、自分の両親に頼んで一緒に暮らすことにしました。

このことがあってからのち、庄屋の息子は山賊に襲われたり激流に落ちたりなどと、災難に遭うたび、いづことなく現れる大蛇に救われるという不思議なことが重なります。これらはみな仏の加護に違いないと思い、両親と相談し、寺を建立し、徳ある上人を呼び寄せました。

成人した庄屋の息子は、今は美しい娘に成長した、かつて山道で助けた女の子と結婚しました。まもなく娘は男の子を産み母となりましたが、毎日寺へ詣っては何ごとか思い悩んでいる様子。

ある日、夫は娘のあとから寺へ行ってみると、熱心に上人の経や説法を聴いていた娘の姿が、だんだん蛇の姿に変わっていくのを見てしまいました。そして、本当の姿を見られたと気付いた娘は、上人の前で、夫や子どもにすべてを打ちあけました。

「以前、山道であなたに助けてもらった白蛇の子が私なのです。大蛇となりあなたを救ったのも私です。おのれの罪の深さは承知しておりますが、できるなら人間の姿でいたいと、毎日請い願っていたのです。」

話を終え別れを告げると、娘は蛇の姿へと戻って行きましたが、悲しみの余り、その場で化石と化したのでした。

その後、庄屋の息子と男の子は、ともに出家し妻でもあり、母でもあったその化石を、永く守り、供養し続けたということです。

57 橋潜り地蔵

伝承地：新里町栗谷地区　　参考書籍：1

（橋潜り地蔵）

新里の栗谷沢ダム入口の坂のふもとのところには、地蔵堂があり、その中に、石でできた地蔵菩薩が安置されている。その地蔵尊は、鞍掛山の頂上にあったものを天狗が今の場所に移したという伝承がある。また「橋潜り地蔵」、「はしか地蔵」と呼ばれ、はしかにかかった者を堂の前の橋をくぐらせるとなおるという言い伝えもある。そして、はしかが流行すると、この地蔵堂でお札が売られたという。その札は自性院が出張して販売した。この物語は、霊験あらたかなる地蔵尊にまつわる話である。

江戸時代の終わりのころ、新里に一人の行者がいました。羽黒山や多気山など山また山を跋渉して修行を行い、加持祈祷の名声がとても高い行者でした。

ある時、行者が、土平山に登り、37日の行を済ませて、下山しようと途中まで降りてきたところ、急に足に痛みを感じ、一歩も歩くことができなくなってしまいました。そこで、そばにあった岩でしばらく休んでいると、足の痛みはたちまち直ってしまいました。行者は、不思議に思い、その岩の下を掘ってみたところ、一基の仏像がでてきました。行者は非常に驚き恐れ、持っていって祭ろうと藤づるで結び、栗谷近くまで持ってくると、不思議なことに微動だにしなくなりました。行者は、この地が地蔵尊の御意にかなう地であろうと考え、祠をたてて祭りました。

この地蔵尊、不思議なほどに万病に霊験があるということで、付近の婦女子で祈願する者が非常に多く、人の絶える時がないほどです。特に、地蔵尊の橋の下を潜ると、その霊験特にはなはだしいといわれています。それも、この橋は、日光東照宮の神橋と直角をなしているからであると伝えられるようになったからで、その後、いつのころからか、橋を潜ることにより、はしかが非常に軽くすむというようになまって伝えられるようになりました。

赤子を背負って、4月半ば、参拝し、橋潜りする人は今でも多くみられます。

（御詠歌）

はるばると　ちかようここに　地蔵尊
はしかかるくと　橋潜るらん

また、この行者は、日光へ行く例幣使の病気を直したため、京都見物をさせてもらい、帰りに錦の直衣をもらい、宇都宮城下でそれを着ると多くの人々が土下座をしたという話も伝わっている。

58 初音観音

伝承地：泉町4—30（延命院）　　参考書籍：1

（初音観音）

宇都宮を代表する名刹、泉町の延命院の地蔵堂（市指文化財）の裏に、医者も見放す頭に関する病を治すことだけでなく悪い頭脳も良くすることが出来ると伝えられている「霊験初音の墓」がある。

初音は、実名を大内トメと言い、家族の犠牲となり子供のうちに売られていった。初音と名を変えたトメは一生懸命に働いていたが、疲労が重なってか頭の病気になり、明治15年18歳の若い身で死んでしまった。

初音は、自分のような身の上の人が二度と出ないようにと願いながら息を引きとったと言われ、悲心抜苦を実証した彼女は観音様の権化であるとされ信仰を集め香煙がたえなかったといわれる。

なお、初音の墓に詣で、願いをかける時は、櫛を供えて祈ると一層効果があると伝えられている。

59 樋爪氏の首

伝承地：大通り5丁目3—2　　参考書籍：5～8

（樋爪氏の墓）

源頼朝が奥州藤原氏を追討する際に、宇都宮大明神に戦勝を祈願して、出陣した。そして、無事、平定することができた。

その時、藤原一族の樋爪五郎季衡とその子経衡の親子を捕虜として引き連れ、二荒山神社に祈願成就のお礼に奴隷として引き渡した。

樋爪五郎は、故郷恋しさのあまり逃げ帰ろうとして、上河原まで走ってきたが追手に捕われ殺害された。その殺された所を樋爪坂といい、首は上河原に、胴は今泉に葬られたという。また上河原で殺され、首は向う岸の博労町に飛んだともいわれ。そしてその首を祀ったところを首塚稲荷という。また墓の周囲に南天が植えられ南天の葉を取れば盲目となるという。樋爪氏の墓は市の指定文化財である。

60 火防ぎ延命地蔵

伝承地：泉町4－30（延命院）　　話者：19　参考書籍：1

（延命院の火防延命地蔵）

藤原宗円が、大仏師定朝作の延命地蔵立像を比叡山から奉持してこの地蔵尊を本尊とする寺を城内に建立し、これが現在の延命院のおこりであると伝えられている。この延命院は、江戸時代に城内から日光街道沿いに移され、現在に至っている。

古代から木造を建築の主体とする日本では火災が生活をおびやかす最大の敵である。宇都宮を全焼させた安永2年（1772）の大火は西原から出火して41町を焼きつくした。天保3年（1832）、明治元年（1868）の戊辰の役、昭年20年の空襲、いずれの場合も地蔵堂だけは類焼をまぬがれた。いつの間にか地蔵堂の石屋根（現瓦葺）に乗って箒を手に火の粉を箒き下していた「小さき僧」が防いでくれたのであった。今昔物語などで伝えられている地蔵の化身「小さき僧」の伝説と全く同類のことが起こったのである。

61 藤原利仁の悪者退治

伝承地：大網町

（寅巳山）

市の北部山間地域には、鎮守府将軍の藤原利仁が、蔵宗、蔵安の両兄弟の賊を平定したという話しが残っている。

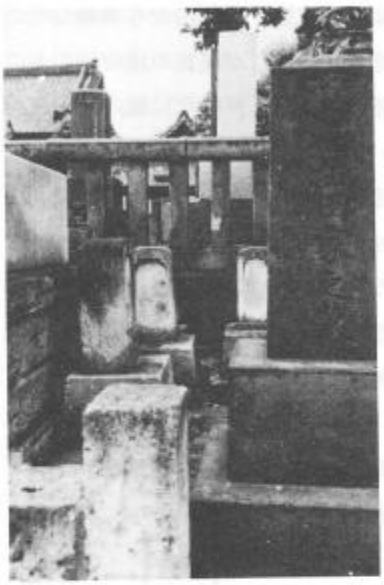
大網町、飯山町の各々の高蔵山、寅巳山に伝わるものであるが、いずれも高座山と称し、次のような内容のものとなっている。

平安時代の初めごろ醍醐天皇の御代に蔵宗、蔵安と称する兄弟がおりました。二人の兄弟は、約1000人の手下を従えて高座山に住み、山の下の部落を荒らし回っていました。村の人たちが困っていると、鎮守府将軍の藤原利仁は、朝命を受けて賊の追討に向かいました。ところが、賊の力が大変強く、容易に平定できません。そこで、村の人たちも協力してようやく賊を退治することができました。この後、村の人たちは、安心して毎日の仕事にいそしむことができたということです。

62 不思議なお灯明

伝承地：南大通り林松寺

参考書籍：24



（林松寺にある石生田家の墓）

今の小幡町あたりは、江戸時代侍屋敷と呼ばれており、たくさんの宇都宮藩士が生活していた。ここで紹介する物語りは、この侍屋敷に住む藩士と信心深いその妻とに降り掛かった不思議な話しである。

江戸時代の終りごろ（文久年間）、宇都宮藩小幡町侍屋敷に石生田勝次とその妻タカが住んでいました。勝次は、金物方という役をつとめていました。

幼少のころから深く仏教を信仰していたタカは、毎朝、夫を送り出した後、仏壇に灯明をともし、静かに合掌し、夫が無事にお役目を果たしてもどることを祈っていました。この灯明は、夫が帰宅するまで消されることはありませんでした。

ところが、慶応4年（1868）12月のある日のこと、これまで赤々と輝いていた灯明が、風もないのに突然白い煙を出して消えてしまいました。夫の身に何事もなければよいが、タカは気が気ではありませんでした。

夕刻、無事に戻った夫を見て安心し、タカはこの日の出来事について一言も話しませんでした。ただ、夫の顔が心なしか青白くみえたのが、タカには気がかりでした。

それから2、3日が過ぎましたが、仏壇の灯明には何の変化もありませんでした。ところが7日目の午後のことです。タカが小用に立ち、戻ってくると、仏壇の中は真暗になっていました。夫の身を案じるタカは、急に胸騒ぎを覚えました。やはり夫の身に何かがあったのでは。やがて夕暮れ時となり、夫は何事もなく帰宅しました。夫の無事な姿を見て気を取り戻したタカは、思い切って今日あったこと、それから7日前にあったことについて話しました。

それを聞いた夫は、にわかに顔を曇らせ、

「何ッ、7日前にもそのようなことがあったのか、うん……、さては、あの日のことが……」

とつぶやき、そのまま固く口を結んでしまいました。

それから11日目の午前中のことです。タカがふと顔をあげて仏壇に眼をやると、パッ、パッ、と灯明の炎が二度鮮やかな光を放ち、スーッと消えてしまいました。タカは、ぞっとして全身が凍るような気がしました。それでも大事な火を絶やしてはいけないと、再び灯明皿に新しい芯を入れて火をともしました。ところが、午後3時ごろ、こんどは灯明の炎が大きくゆれてパッと消えてしまいました。いよいよ、夫の身に何かあったにちがいない。タカは、祈るような気持ちで夫の帰りを待っていました。そして夕方になり、夫が戻って来ました。

タカは帰宅した夫の顔をみるなり、今日、昼間と昼過ぎとに灯明が二度も消えたことを話しました。この話しを聞いて夫は、

「実はこの２月から御役替えとなり、処刑方にまわったのだが、先の２回といい、今日といいいずれもこの手で罪人の首をはねたのである。今日は、昼前に２人つづけて斬り、昼過ぎに１人斬った。確か、時刻も同じころである。まさか罪人の魂が、わが家の仏壇に現われるとは。不思議千万。」

と言い、これまで話しを内緒にしていたことをタカに詫びました。

夫から始めてその話しを聞かされたタカは、

「人の怨霊というものは、恐ろしいものでございます。……それらの方々の供養に一心にお経を、お唱えして差し上げましょう。」

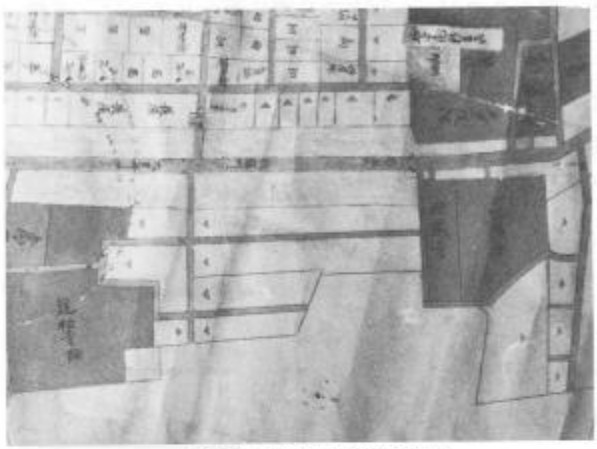
と言って、それから毎日、熱心に読経をつづけました。そして、その後は夫が罪人を斬首した日でも、灯明は消えなくなったということです。

石生田勝次は幕末における宇都宮藩の「据え物切りの達人」であり、また首斬りの名人とも言われた人物で明治14年４月22日に没し、妻タカは、明治10年11月19日に没した。その墓は共に林松寺にある。

63 身代り地蔵

伝承地：西原３丁目

参考書籍：1・17



（地蔵寺跡周辺の古地図）

お地蔵さまは、村境い、墓地、お寺などいろいろなところに建てられ、多くの人々の信仰をうけ、最も身近かな仏様である。

この伝説は、今は廃寺となった時宗の寺である地蔵寺の地蔵さまにまつわるものである。しかし、廃寺になったときに地蔵様も行方不明となって今はない。

元享のころ（鎌倉時代）、陸奥国信夫郡（福島県）に、朝はやくから、夜遅くまで働くとても仲の良い百姓の兄弟がいました。二人とも父親の仕事を助け孝行者として近所では評判の若者でした。しかし、突然の父の死により、土地の相続のことで、兄弟は激しく争いました。そのことが、領主の耳に入り、領主はいきさつを詳しく調べさせたのち、兄の方が非道であるとし、直ちに捕えて、首を　ねてしまいました。

兄の死を知らされた弟は、このことを深く悲しみ、ふだんから兄弟の信心していた高野山へ兄の首を携えて傷心の旅に出ました。白河の関を越え、荒涼とした那須野が原を抜け、宇都宮に来て、地蔵寺に一夜の宿を乞い、その晩、死んだ兄のため一心にお経をあげました。翌朝、出発となって首箱を持ちあげようとしたが、その箱が急に重くなり、どうしても持ち上げることができません。

そこで不思議に思い、箱を開け、中を改めてみると、兄の首がいつのまにか石で造ったお地蔵様の首に変わっていたのです。このことをいぶかった弟は、寺の和尚に今までの事情を話すと、和尚は、新しく地蔵の体を作らせ、首とつなぎ合わせて魂を入れました。そして、しばらくの間、寺に滞在して和尚と二人でお経をあげることになりました。

月日が流れ、滞在が６か月を過ぎようとしていた時、風の便りで、斬られたはずの兄が京都の六波羅にあって、元気に暮らしていることが弟の耳に入りました。それと時を同じくして兄も弟の様子を知ることができました。兄は、弟に会いたい一心で取るものもとらず、宇都宮の地蔵寺に向かって京を下りました。再会した兄弟は、手に手をとって喜び、お地蔵様に向かって深く頭をたれました。そして、和尚に感謝のしるしとして、この地蔵尊を寄進して帰郷し、毎年、地蔵尊の縁日には、２人して同寺を訪れたということです。

この地蔵尊は、後に「身代り地蔵」と呼ばれ、多くの人々の尊信を集めたといわれています。

64　八坂神社のわき水

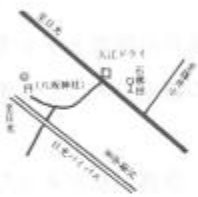
伝承地：石那田町

（八坂神社のわき水）

石那田町岡坪にある八坂神社の裏山に、わき水の出るすきとおった池がある。

昔、村人のだれと言うことなく、ここにわき出る水を見つけ、時にはのどを潤していた。

ある年、村中に目の病が流行し、村人は、大変困ってしまい、治療のため、様々な手だてをつくしてみたが、効果はなかった。



そうした時、八坂神社の池にわき出る水で目を洗ったところ、たちどころに目の病が治り、それ以後、目が悪くなると、ここからわき出る水で目を洗うようになった。今でも八坂神社のお祭りには、石那田の人たちによって池の清掃が行われる。

65 六道閻魔堂

伝承地：西原１－６－11　　話者：２・６　　参考文献：１

（閻魔堂）

現在の西原１丁目の新川沿いに閻魔堂がある。伝承によると、弘法大師がこの地を巡錫した時、ここに草庵を結んで、丈８寸の行基作の閻魔像を安置し、この地を六道と呼んだという。六道とは仏教で地獄道、餓鬼道、畜生道、修羅道、人間道、天上道の六つの世界のことをいう。この堂の南の道が、元は六つの辻に分かれていたことによる。

後世、元禄14年（1701）光琳寺六世専誉上人の時、堂宇を建立し、高さ８尺余りの閻魔大王を祭ったが、戊辰の役及び明治10年の火災で焼失し、現在の堂宇は明治39年11月の建立であって光琳寺の所有である。なお行基作の閻魔像は光琳寺に今でも保存されている。

奈良に都があった聖武天皇の御代に、池や道や橋を各地につくり、人々から生き仏のようにあがめられた行基という高僧がいました。行基は欲のみにふけって来世に苦難をうけることを知らない人々が余りにも多いのを、あわれに思い、すみやかに仏法を信じて安楽浄土に生まれる方法はないものかと七日の間、阿弥陀仏を念じました。

満願の日の暁に大忿怒の相で閻魔大王が現われ「汝末代の人々のために予の像を彫刻して罪悪の人々を救うべし。」と言うと御姿を消してしまいました。そこで行基はお告げの通り、尊像三体を彫刻して開眼供養すると、遠近の人々は在家出家を問わず袖をつらねてこれを拝み縁を結び、利益をこおむる人は天下にみちみちてきました。

その後、弘法大師が真言宗を広められた時、この尊像は大師に「予汝と共に東国へ赴き迷える人々を救わむ。」と告げました。

大師が日光登山のおり、木像と共にこの地を訪れたところ、不思議にも常に災いから大師をお守りになられたので、この地こそ有縁の地であると思われて、一宇を建立し、あつく尊像を安置しまたこの地を六道と名づけられました。

元禄のころ、日野町の森幽可という人が不思議な利益をこおむり八尺の木像を彫刻してこの尊像をお腹ごもり奉り、それ以来お腹ごもりの尊像と称するようになったといわれています。

かくして、この尊像を拝して厄難を免がれ、二世安穏の大利得るものは年をへると共にその数を増していきました。

未収録分表題一覧（市文化財調査員から報告のあったもの）

番号	表題	伝承地	話者番号	参考書籍一覧
1	安達藤九郎盛長の墓碑	西刑部町1133	21	
2	泉町々名の由来	泉町２―16	22	
3	宇都宮城の抜け穴（間道）	市街地	28	8
4	梅園春男	関堀町	20	4・29・35
5	和尚塚の伝説とその歴史、遠歓寺の沿革	戸祭２―４―17	23	4・7・8
6	かぎ提燈と若衆	下砥上町	8	
7	亀井六郎茂清の墓	徳次郎町（上田中）		7・8・33
8	川村迂叟と大嶋製糸工場	石井町	21	
9	寛永の米騒動	石町		7・8
10	桑島城	上桑島町788	21	
11	小林清次郎	海道町535―１	17	4・29・35
12	細工瀬の子育地蔵	下横田町	7	
13	三本仏	上欠町	34	34
14	志士の難を救った菊御紋本門主御用の札	材木町６―11	5	16
15	子女相続14代続きの旧家	駒生町947	25	25
16	篠井神祠	篠井町826		
17	下横田の五輪塔	下横田町	7	
18	鈴木龍哉	岩曽町	17	29・35
19	清左衛門の蹴鞠	二荒町５丁目		6・7・8
20	高麗神社(上の宮)と大島の由来について	石井町	33	15
21	寺小屋の碑	上桑島町794	21	
22	道閑坊の話	南大通り1―8―19	30・32	6・7・8・17
23	戸祭町名について	戸祭元町	14	
24	長岡太子堂の由来	長岡町	20	
25	ニワトリさま	下砥上町	8	34
26	根来塚	竹林町	17	4・7・8・9
27	百年前の上桑島の風景	上桑島町	21	
28	明神の古井戸	徳次郎町2454		33
29	正宗の鍛治跡	徳次郎町		33
30	宮此講太々神楽	清住１―３―39	10	
31	飯盛女郎と新立地蔵	雀の宮６丁目		14
32	明神の井	馬場通り１丁目		4・6・7・8・17
33	籾摺騒動と鈴木源之丞	御田長島町		4・6・7・8
34	本意ない坊	材木町		6・7・8・17
35	山本の長者屋敷	山本町	20	
36	連隊長と百穴	長岡町	20	20

さ　く　い　ん

あ　行

朝日観音……6
痣地蔵……7
求食川……19
小豆坂……12
汗かき阿弥陀……8
阿蘇神社……10
愛宕山……9
安達藤九郎盛長……62
雨乞い山……9
雨子塚……9
天子塚……9
阿弥陀仏……8
あやめ……26
綾女姫……36
荒針……17
飯田……16
飯山……9,10,37
五十里洪水……8,11
池辺郷……23,39
一向寺……8
石塚田勝次……57
石那田……15,25,48,60
泉町……31,55,62
一条町……12
稲荷……34,35,52
イノシシ……46
宇都宮景綱……6
宇都宮国綱……14
宇都宮貞綱……38
宇都宮城……83
宇都宮宗円……14,37,56
宇都宮成綱……33
宇都宮尚綱……8
宇都宮明神……14
宇都宮満綱……8
宇都宮持綱……8
宇都宮基綱……6
梅園春男……62
うらない石……15
うらない仏……15
栄鉢和尚……40
恵心僧都……35
延命院……55,56
延命地蔵……56
大網……15,56
大内トメ……55
応願寺……41
大石神社……16
大谷観音……17
大谷寺……17,49
おしどり塚……19
おしんめさま……20
和尚塚……63
男抱山……21
おびんずるさん……20
御宝……22

か　行

海道(街道)坂……43,44
鏡が池……6,23,30
かぎ提燈……19,62
梶原景時……19,38
鎌倉街道……43
鎌倉坂……23,43
鎌倉橋……23,43
上桑島……45
亀井の水……25
亀井六郎……24,30,62
茅勘助……25
川村迂叟……62
貫栄……40
観音……17,24,35,51,55
菊寿丸……38
きし江……21
狐の詫証文……33
黄鮒……26
久武川……27
草結観音……22
首切坂……12
蔵宗・蔵安……10,15,56
桑島城……62
啓蟄禅師の不覚……33
源三郎……17
興禅寺……38
孝子桜……28
弘法大師……17,31,49,52,61
光琳寺……61
小門町……51
古賀志……28
ごぜ石……29
御前桜……30
小林清次郎……62
こま犬……20

さ　行

材木町……8
坂上田村麻呂……22
桜……23,28,30
三本松……62
自性院……54
獅子舞……10,37
静御前……23,24
静桜……30
鎮の宮……36
地蔵……15,41,54,56,59
実信房蓮生……6
篠井……31,46
篠井神祀……62
篠井の池……31
下欠……50
蛇々窪……31
祥雲寺……9
成高寺……33
成高寺の天狗……33
白坂観音……35
白沢……43
新左衛門稲荷……34
神明宮……20
甚九郎……21
末広稲荷……35
鈴木龍哉……62
雀の功徳……36

雀の宮……14,36
素盞嗚命……36
駿河次郎……24,30
清巌寺……44
清左衛門……62
関堀町……10,37
善願寺……22,40
宗円獅子舞……37
訴人婆さん……38

た　行

田芋おぢ……39
大工町……11,35
大豆三粒金仏……24,40
大蛇……31
大日様……28
田うない地蔵……41
高座山……10,15,56
高龗神社……48,62
多気城……42
狸坂……12
太郎左衛門……50
智賀都神社……7,31
稚児が坂……43
稚児の墓標……44
千歳坂……11
長楽寺……8
釣天井……13
鶴舞塚……44
貞禅……33
手負地蔵……41
鉄五郎……45
手引坂……17
伝右衛門……46
東勝寺……6
道閑坊……62
東谷(当矢)……44
道鏡……48
道場宿……7
百目鬼……47
徳川家光……13
徳川忠長……13
徳次郎……7,20,21,29
飛山城……48
戸祭……62
戸室山……49
豊城入彦命……31,36,51
豊臣秀吉……8,14,48

な　行

長岡……47,51
長岡観音……51
長岡太子堂……62
長柄稲荷……62
ナマズ……48
新里町……10,27,32
ニワトリさま……62
根来塚……62
念仏坂……29
野沢……30

は　行

羽黒山……11
白蛇……53
はしか地蔵……54
橋潜り地蔵……54
八幡山……19
初音観音……55
塙田……47,53
日枝神社……37
樋爪氏の首……55
百穴……47,49,54,62
藤原実方……36
藤原利仁……10,15,56
藤原角輔……37
藤原秀郷……47
二荒山神社……9,11,14,19,23
24,26,30,31
34,36,47,55
へび……31,52,53
弁慶……24,30
弁天沼……31
宝勝寺……20
宝泉寺……32
蓬莱観音……6
本恵ない坊……62
本願寺……47,53
本多正純……43

ま　行

正宗の鍛治跡……62
豆太鼓……26
饅頭物語……36
身代り地蔵……59
御田村……41
源義経……23,24,30
源頼朝……19,23,24,30,38,43,55
源頼家・義家……37
宮内……29
宮比講太々神楽……62
明神の井……62
明神の古井戸……62
無住法師……19
宗高……38
飯盛地蔵と新立地蔵……62
元観音……61
餅……32,36,49
籾摺騒動と鈴木源之丞……62

や　行

八坂神社……60
弥治右衛門……50
日本武尊……44
山本町……35
山本の長者屋敷……62
横山……29,46
綿花……26

ら　行

竜神様……9,48
林松寺……57,58
六道閻魔堂……61

あ と が き

市教育委員会では、市民の皆さんに文化財について御理解をいただくために、文化財シリーズとして「宇都宮の民俗」「宇都宮の民家と屋並」「宇都宮の手仕事」「宇都宮のいしぶみ」「宇都宮の名木」といった身近な生活のなかに題材を求め、発刊を重ねてまいりました。

今回、シリーズ第6号として「宇都宮の民話」を関係者の御指導、御協力によりまして発刊できますことを厚くお礼申し上げます。

むかしの子どもたちは、祖父母などからいろいろな民話を聞くことにより、私たちの祖先が、なにを驚き、なにを悲しみ、なにを喜びとしたかを知ることができ、そこから豊かな心情を養うとともに、ふるさとを大切にする心も育てることができました。

しかし、急速な社会の変化により、生活様式が変わり、多くの人々によって語り、伝えられてきた民話は次第に姿を消しつつあります。

そこで、市内に埋もれた民話をできるだけ採集し、十分といえないまでもこの冊子を刊行いたすことにしたわけです。

なお、民話の登場人物、場所、時代背景などは、話者や、参考にした書籍等によってまちまちであり、一般的と思われる伝承に従って構成いたしました。

終りに、この冊子が、多くの人々に読まれ、活用されることにより、ふるさとを見直す一助となれば、編集に携わった者として喜びに堪えません。

昭和58年2月

編集責任者
宇都宮市教育委員会
社会教育課長　半　田　　昭

文化財愛護
シンボルマーク

文化財シリーズ第6号